

幻想入りした高校生がのんびり異変解決する話し

からすみ28

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

これは一人の少年がのんびり異変解決をするお話し。

はい、どうも皆さんはじめまして、からすみ(元ゆは)と申します。
これは自分の自己満足&初めて書いた小説なので、滅茶苦茶駄文です。

それでもいいという人はゆっくりして行ってね。

(追記) 5月24日 間違えて9話を消してしまったので再投稿しました。本当にすみません。

目次

第零話	主人公設定	1
第一話	幻想入りしました	6
第二話	常識を捨てるのが幻想郷	9
第三話	能力がありました。	12
第四話	ようやく出来た自己紹介	16
第五話	お金って大事だよね。	19
第六話	嫌な事は重なる・・・と、思う	22
第七話	嫌な事は重なる（確信）	25
第八話	目覚まし時計は役に立たない事が多い。	29
第九話	無狂気の裏にある狂気	33
第十話	決意を懐くのは大切だと思う。	38
第十一話	悪戯はばれたときが怖い	43
第十二話	自業自得？なにそれ美味しいの？	47
第十三話	鴉って美味しいのかな？（真顔）	51
第十四話	急に見た目を変えると何かと不便だよね	56
第十五話	自分のことって意外と知らないよね	62
第十六話	モフモフは正義、異論は認めん	66
第十七話	黒歴史は誰にでもある・・・はず	73
第十八話	家が壊れるのはよくあること	78
第十九話	誰にも怖いものはある	84
第二十話	ゲームで笑ってるボスは大体強いよね	89
第二十一話	絶望って、いつも突然やってくるよね	94
第二十二話	小説とかの他の文ってあれは誰目線なんだろうね	99

第零話 主人公設定

青木 審

概要

八雲 紫によって幻想郷に連れてこられた後、幻想郷に残ることにした外来人。睡眠が大好きで、寝ているのを無理やり起こしたり、寝ている時にちよっかいをだすとキレる。元陸上部のため足が速く、反射神経が良い。極度の幽霊嫌いで、見ると気絶しかける。

容姿と服装

髪は黒く、肌は比較的白い。目は黒色で顔は整っているが本人は自覚なし。身長は高く、180cm前後。よく実年齢より上に見られる。普段着にはジャージを好んで着ているが、外出時には、黒のズボンに灰色のパーカーを着て、その上に青色のロングコートを冬に、黒の半ズボンに白のTシャツの上に袖の無い青色の上着を夏に着ている。服は同じのが3着ずつあり、本人曰く「俺のファッショセンスは絶望的だから人に選んでもらったのを着てる」とのこと。

性格

基本的に感情の起伏が激しいが本気で起こる時はあまり無い。(寝ている時は別)根は優しいが、その反面自分と親しい人物が傷つけられるのを異常な程嫌う。キレると無表情になり、何も喋らなくなる。また、基本的にめんどくさがりで自分が好きなこと(料理やゲームなど)以外の事をあまりやらないが、頼まれたら文句を言いながらだがちゃんとする。モフモフした物が好きで八雲 藍のしつぽを見たときは思わず「触らしてくれ!」と頼み込んだことがある。押しに弱いため、頼み込まれると断れない。

能力

〔自分の記憶にある人物の能力を得る程度の能力〕

所詮、チート能力。相手が二次元だろうが三次元だろうが、記憶にあれば能力を得られる。能力を得るタイミングは相手を見たときで、もし能力を持っている人物を忘れた場合はその能力も消える(自分で消すことも可能)。ただ弱点としては、相手がどんな能力でどんな事

が出来るか分からないと使えない所と、能力を得たとしても使いこなせるかは分からない所だ。これは、たとえ能力を持つていても知らなければ使えず、能力を制御するには練習が必要な為である。(例外として常時発動型の能力は得た瞬間から発動する。)身体”能力”も反映可能で、こちらは一時的なものであり、応用で能力の持ち主の武器も再現可能。本人曰く「イメージが大事」だそうだ。

スペルカード

(サンズ編)

「骨弾」 ボーングトリング

30本程の骨を勢いよく相手に向かって飛ばすスペル。速度はそこそこあるが、一方向にしか飛ばさない為、弾幕ごっこに慣れている人物か、中・上級妖怪なら避ける事が出来る。

「骨砲」 ガスターブラスター

竜の頭が骨のような物(ガスターブラスター)を出現させ、レーザーを放つスペル。自分の前にガスターブラスターを出現させ、相手の攻撃を防ぎ、カウンターを叩き込む事も出来る。

「近道」 ショートカット

いわゆる瞬間移動のスペル。自分から半径10m以内か、一度言っただことのある場所に移動可能。

「開眼」 ブルーアイ

左目が青く発光し、身体能力が上がる。ただ、発光中は片方の目だけ回りが青く見え、目の発光は5時間程しないと元に戻らない為、本人はあまり使いたくないらしい。

「重符」 重力操作

「開眼」ブルーアイを使用している時に使えるスペル。相手を重力に逆らえないようにする。また、相手にかかる重力の方向を変えることも可能で、相手を壁にぶつける事も出来る。そして、数少ない漢字のスペルの一つ。

「骨符」 バッドボーン

こちらにも「開眼」ブルーアイを使用していないと使用出来ないスペル。サンズの最初の攻撃を元になっているが、こちらは地面に叩きつけ

た後、相手の回りに骨を出現させて行動を制限してブラスタを放つ。

「拳骨」 骨落とし

相手の頭の上に骨を一本出現させ、そのまま落とすというスペル。戦闘の為のスペルではなく、主にお仕置きの為に使うスペルだが、本気の威力は吸血鬼であるレミリアを気絶させる程。別にスペルにする必要はなかったのだが、何となくで作ったらしい。これも数少ない漢字のスペルの一つ。

「速骨」 ジェットボーン

一本の骨を高速で放つスペル。「骨弾」ボーンガトリングよりも速度があるが、一本しかないため当たる確率は少ない。しかし、気づかれないので不意打ちに適している。

「速骨弾」 ジェットボーンガトリング

「骨弾」ボーンガトリングと「速骨」ジェットボーンを組み合わせたスペル。スペルの内容は「骨弾」ボーンガトリングと変わらないが、全ての骨の速度が「速骨」ジェットボーンと同じ為、非常に避けにくい。ただ、直線上にしか飛ばさないので飛ばす方向を把握しておけば比較的避けやすい。

「骨雨」 ボーンレイン

骨を相手の真上から雨の様に降らせるスペル。本数は50本程で、範囲は相手を中心にして半径3mくらい。上からの弾幕だが、密度はそこまで無いため、避けやすい部類に入る。

「骨壁」 ボーンウォール

骨の壁を出現させるスペル。基本的に相手の弾幕を防ぐ為に使う。耐久性は、霊夢の夢想封印に耐えるくらい。

「骨箱」 ボーンボックス

対象の回りを囲うように一辺5mの立方体の骨を出現させるスペル。相手を対象にすれば、行動を制限したり捕獲する事が可能で、自分を対象にすれば相手の弾幕を防ぐ事が可能。耐久性は「骨壁」ボーンウォールと同じくらい。

「死骨」 ボーンレクイエム

現サンズ編ラストスペル。「開眼」ブルーアイと「重符」重力操作を使用していないと使えない。辺り一面に骨を撒き散らしながら地面に骨を出現させ、上からブラスタを乱射する。相手は飛べないため、下・横・上の4方向からの攻撃を避けないといけない。因みに耐久スペルで、効果時間は2分という鬼畜。

(ニンゲン編)

「決意」セーブ&ロード

死に戻りのスペル。性能はニンゲンのと全く同じで、死んだときだけ発動可能。

「武器」本物のナイフ

ナイフを出現させるスペル。刃が赤くなっており、当たっても外傷は無いものの、かなり痛い。

「防具」ハートのロケット

ハートの形をした首飾りを出現させるスペル。受けるダメージをかなり減らすが、避けれる訳じゃ無いので、弾幕ごっこではあまり使わない。

「赤刃」ジェノサイドウエーブ

赤色の斬撃を飛ばすスペル。「武器」本物のナイフを使っていないと使用不可能だが、速さはそこそこあり、さらに無限に放てるのが最大の特徴。連射速度は1秒に2回程。

「決意之剣」レッドソウルソード

「武器」本物のナイフの上位互換スペル。刃渡りが「武器」本物のナイフより長く、細い。これを使用しても「赤刃」ジェノサイドウエーブを使える。イメージはグリーチテールのフリスクが使っていた剣。

「狂愛」LOVE20

現ニンゲン編ラストスペル。身体能力を限界まで上げるが、その代わりに使用中は慈悲の感情が無くなり、殺し合いを楽しむようになる。

(ナイトメア編)

「悪夢」ナイトオブタイム

アンダーテールAUの一つ、ドリームテールのナイトメアを模した姿になるスペル。体が不の感情で作られた黒い液体になっており、物理攻撃や弾幕が聞かず、どんな形にも変化可能、更には硬化もできて、不の感情を使うことにより体積も自由自在に変える事ができ、加えてソウル（魂）が999個ある為に実質不死身という、正しくチートを具現化したような性能をしている。主に触手を使った攻撃と精神攻撃を得意としていて、弱点としては光系統の技が効果的だが、実質不死身なので意味はあまりない。

「明暗」悪夢と現実の狭間

相手に弾幕の幻覚を見せ、避けた場所に死角から弾幕を打ち出すスペル。避けにくいのはもちろん、このスペルだと思つて突っ込んで被弾する事がある為、周りから嫌われているスペル。数少ない漢字のあるスペル。

「黒触」ブラックバインド

触手を使って相手を拘束する技。地面に自らを溶かした液体を張り巡らして、そこから触手を出すことも可能。これがトラウマの天狗が居るとか居ないとか。

「正夢」ナイトメアドミネイト

相手の目を見ることにより操るスペル。使われた側はおぼろげな夢を見ている感覚に陥り、命令されるがまま動く。

「暗黒符」ダークファンタジア

ナイトメア編ラストスペル。対象の周りを触手で球体状に囲み、視界を奪って弾幕を放つ。弾幕が背景と同じ黒色で気付きにくく、加えて時間が過ぎる毎に不の感情でネガティブになり、気力をそぐという鬼畜設定になっている。一応、周りを囲っている触手は液体なので、突っ込めば外に出られるが、凄くネガティブになる。相手を絶対に殺りたい時に使うスペル。

第一話 幻想入りしました

小鳥のさえずりを聞きながら、目を覚ます。

「あ〜いい朝だな〜」

辺り一面木が並び、心地よい日の光が降り注ぐ。

「・・・何で俺は森に居んの?」

うん……。ちよつと状況を整理しようか。えつと、確か昨日は・・・学校が終わる↓家に着く ↓ゲームする↓寝る↓起きたら森の中。・・・うん。一切森の中に入るようなことはしてないよな。それにそもそも俺が住んでるのは住宅街で、こんな森近くにはない。

「・・・とりあえずこの森を抜けよう。」

そう思った俺は、立ちあがり適当に歩きだす。

〜約30分後〜

「出口はどこだ〜」

動きだしてからかなり時間が経っているのにいまだこの森から抜け出せない。

「持つてる物も心もとないし、早くここから抜けないと・・・」

ちなみに今ある所持品は、スマホ(充電30%) 飴(オレンジ味)だ。正直俺は虫が大の苦手で、こんな森に防虫スプレー無しで長い間居ると(精神的に)死んでしまう。そのため、少し前から走っているのだが・・・

「全然この森から抜けない・・・」

いくらなんでもおかしい。自慢じゃないが俺は陸上部で、足は速い方だと思っている。なのにさつきから走っても走ってもこの森から抜け出せない。それくらいこの森はでかいのか?

〜走ること約10分〜

「にしても、今更だけどこどこだよ。」

ひとしきり走って疲れたので俺はすぐ近くにあった切り株に座り、今更ながら何故俺がここにいるか考える。

「夢ってことはないし・・・」

一番最初に思ったのはこれは夢だ、という考えだったがさつき転け

た時にちやんと痛みがあつたから違う。

「誘拐されたつてもないだろうし……」

もし誰かが誘拐したのならこんな森に置いていかないだろう。

「……もうこれ考えるだけ無駄だな」

俺は、ここが何処か考えても無駄だ、という結論にたどり着いたので、また歩きだそうと立ち上がる。すると、

「お前は、食べて良い人類かー?」

突然、後ろから声をかけられたので振り返つてみた。するとそこには黒いワンピースを着て、頭に赤色のリボンを着けた5〜6歳の少女が立っていた。何でこんな森に子供が?という考えは、さておき。

「えっと……お前今なんて言った?」

俺が聞き間違えてなければ、目の前の少女はとんでもないことを言つたんだけど……

「んー?お前は、食べて良い人類かー?て言ったぞー」

……うん。どうやら聞き間違えじゃないようだ。つま

り、この目の前の少女は俺を食べて良いか?と言っているらしい。もちろん俺の答えは、

「食べては駄目な人類だ。」

NOだ。まさか本当に食べるとは思わないが、流石に自分を食べて良いとは言わない。

「そうなのか」

「ああ、そうなんだ。」

「じゃあ、何か食べれるもの持つてないか?」

食べれるもの、食べれるもの……あつ

「なあ、これ食べるか?」

俺がそう言つて俺が取り出したのは飴（オレンジ味）だ。

「なんだ?それ。」

「飴だよ。その袋はずして食べるやつだ。」

「ん、おいしいのだ?」

良かった、どうやら気に入ってくれたようだ。目を輝かして食べている。

「なあ。」

「ん〜？」

「ここって何処だ？目が覚めたら、ここにいたんだけど。」

一応、聞いてみる。

「なんだ、お前外から来たのか〜」

ん？外からきた？

「なあそれってどういう〜ならあそこ〜につれていくのだ〜」ことつて何で腕つか〜ハアアアアア？!」

何かよく分からないことを言ってるので質問しようとする急に腕を掴んできた、と思えば少女はそのまま飛んだ。そう、飛んだのだ。

「え〜飛んでる？何で？えつと、まって、いきなりすぎて頭が追いついてない」

今の俺の状況は、腕を掴まれて空に浮かんでいる状態だ。ていうか少女ってこんなに力強かったけ？腕一本で俺の体重を支えてるけど・・・

「もう、考えるのやめよう・・・」

色んなことが有りすぎて、考えるのもつかれた俺は少女に連れられるまま、何処かに向かうのだった。

第二話 常識を捨てるのが幻想郷

く前回のあらすじく

少女の力が強い件について

名前も知らない少女に連れられること10分後。ようやく目的地に着いた。そこは、良く言えば年期がたった、悪く言えばボロボロの神社だった。

「霊夢ー。外の人間を連れてきたぞく」

俺が神社を眺めてる間に、俺を連れてきた少女は、神社の中に入って誰かを呼び出した。にしても、空から見たあの森、だだっ広かったな。どうりでいくら走っても抜け出せないわけだ。

「またなの？はくあいつもいい加減にしなさいよね」

そんなことを考えるうちに、どうやら来たらしい。声がした方を見みると、恐らくこの巫女なのだろう。赤と白の何故か脇が露出している巫女服を着て、頭に赤いリボンを着けた俺と同じくらいの年齢の少女が、めんどくさそうに神社の中から出てきた。にしても、この寒い時期にそんな格好でさむくないのか？

「で？あんたがその外来人なの？」

「その外来人が何か俺は知らないんだが・・・」

「あんた、ルーミアから聞いてないの？」

「ルーミアってあの金髪の？」

「そうよ。」

へえーあいつルーミアって言うのか。

「俺は何も聞いてないが。」

「じゃあ、今から全部説明するから聞いてなさい。」

く少女説明中く

「なるほど・・・」

今、霊夢から説明されたことをまとめると、ここは幻想郷という、いわば異世界だということ、幻想郷には、妖怪や妖精、更には神様まで居るということ、そしてたまに、この幻想郷を作った一人である八雲紫と言う妖怪が、外から人を連れてくると言うこと、の三つだ。本

来なら、こんな話しは信じないのだが、何せ俺はここに来るまでにルーミアが空を飛ぶのを見ていたので簡単に信じれる。

「で？あんたは、どうするの？」

「どうするのって、どういうことだ？」

「このままこつちに残るか、外に帰るのか、どつちにするの？」

「帰れるのか？」

「帰りたいのなら、帰れるわ。」

うーん、どうしようかな、正直俺の親はクズだし、別にあつちに心残りなんて無いし、帰らなくても良いけど、こつちで暮らすとなると、ゲームが、アンテが出来なくなるから嫌なんだよな

「なあ、こつちに、俺の荷物は持つてこれるのか？」

「うーん、そういう事は紫が決めてるから、本人に聞いてみるしかないわね。」

「そうか・・・」

「だから紫、いい加減に隠れてないで出てきなさい。」

「？」

「あら、きずいてたの？」

「はい!？」

霊夢が、何も無い空間に話しかけたので不思議に思っていると、いきなり目の前の空間が裂けて、金色の髪に変な帽子をかぶった女の人が出てきた。

「え？え？どうなってるの？」

俺がその余りにも常識ではあり得ない光景に、驚いているまにも話しは続く

「紫、あんたどれだけ外の人間を連れてくるわけ？もう今月だけで三回目、そのたびに元の世界に返すこちらの気持ちになってみなさい！」

「まあまあ、そう怒らないで霊夢。せっかく貴女のために、プレゼントを用意したんだから。」

「プレゼント？」

「ええ。貴女の仕事が楽になるプレゼント」

そう言つて紫さんは、何処か胡散臭い笑みを浮かべながら俺を指差して、

「彼がそのプレゼントよ」

とんでもないことを言つた。

第三話 能力がありました。

く前回のあらすじく

何か勝手にプレゼントにされたんですけど・・・

「彼がそのプレゼントよ。」

「・・・え?」

ちよつとなに言ってるか分から無い。

「紫、ふざけないでちょうだい。」

「あら霊夢、私はふざけてないわよ?」

「彼がプレゼントって言ってる時点で、ふざけてるとしか思えないのだけど?」

「私は貴女がこれから大変になるだろうから、親切心でやったのに酷いわ〜」

「あんたねえ、たとえそうだとしても能力も無い、ましてや外の人間が役に立つ訳無いでしょ。」

全くもってそのとうりだ。そもそも、さっき聞いた話だと妖怪退治とかもやってるみたいだし、俺にはそんなことはできない。

「あら、彼は能力持ちよ?」

だから俺は、霊夢の役には立たな——はい?
「今なんて、」

「だから貴方が能力を持つてると言っただの。」

え?・・・ちよつとなに言ってるか分からない。(本日二度目)
「本当なの?紫。」

「ええ、それもかなり強力なのをね。」

「えつと、それってどんな能力なんですか?」
正直、自分に能力があるなんて思えないだが。

「あなたが持つてるのは、「自分が記憶している人物の能力を得る程度の能力」よ。」

「え!?!」

強力とは言ってたけど、想像してたより凄いな・・・

「紫、それ本当に事実なんでしようね?」

「私も最初きずいた時は信じられなかったけど、何度確認しても結果は同じだったわ。」

ん〜何か実感わかないな・・・ってあれ?そーういえば

「あの〜」

「何?」

「結局、荷物の件はどうなったんですか?」

「ああ、それなら今から貴方の家に送ってあげるから、荷物とかまとめるといいわ。」

良かった〜どうやら俺の生命線(PS4 & PC)は、持ってこれそうだな。いや〜正直な所、あれが無いとアンテが出来ないからマジで良かった。って、ん?アンテ?

「紫さん。」

「何かしら?」

「俺の能力って、記憶さえしていれば存在しない人物の能力も使えるんですか?」

「使えると思うわよ。」

「よっしゃー……ー!!」

夢が叶った・・・もう死んでも良い・・・

「あんた、何いきなり叫んで、って何で泣いてるの!?!」

「生きてて良かった・・・」

〜少年クールダウン中〜

「大変お見苦しい所をお見せしました・・・」

「全くよ、大声だして・・・あんた何歳なわけ?」

「17歳です・・・」

いや、だって嬉しくない?ゲームの中のキャラクターの能力使うのって、俺くらいの年齢の人の共通の夢だと思うよ?

「あんた17歳だったのね、てつきり25歳くらいだと思ってたわ。」

「よく言われるよ。」

俺は、何故かいつも実年齢より上に見られる。小学生のころ学校で友達に聞いたら、「何かお前の顔、大人びてるんだよなく背も高い

し。」って言われた。

「ところで貴方、荷物は取りに行かないの？」

「あつ忘れてました。」

「じゃあ今度こそ貴方の家に送るから、荷物をまとめてなさい。」

「分かりました。」

「じゃあ行つてらっしやい♪」

「へ？」

紫さんがそう言った瞬間、俺の下の地面が裂けて俺はそのまま落ちた。

「ウワアアアア！」

ガッツ！（床に頭から落ちた音）

「い、痛い」

うん？何か見覚えあるような・・・あつ俺の部屋だ、ここ。

いやーにしても懐かしいなく。中学に入学してからずっと寮にいたから五年ぶりか？

「親父は・・・パチンコか。」

俺の親父は、働かない。家に居ても何もしない。そのくせ朝から晩までパチンコして金を使う。といったいわゆるクズだ。一方で母さんは、俺の為に仕事を頑張ってくれる人でいつも俺に優しくしてくれていたが、仕事中に突然倒れて一ヶ月前に死んでしまった。だからこっちは未練は無いし、逆に高校の費用もどうしようか困っていたのでちやうど良かった。さて、荷物まとめますか。

少年準備中

「よし、大体こんなもんだろ。」

ちなみに持つていくのは・生命線（PS4&PC）・モバイ

ルバッテリー・スマホ・料理道具一式・バイトして貯めたお金・着替え・枕・腕時計・その他色々だ。これらを全てバッグに入れ終わったのが、落とされてから三十分ほどした頃だった。

「もうこのこともお別れか・・・」

あちらに行ったら、もう帰ってくることも無いだろう。だから俺は、最後に母さんの仏壇に手を合わせる事にした。

「母さん。俺は新しい場所で新しい生活をします。どうか見守っててください。」

よし、これで思い残す事もないな。あとは紫さんがくるのを待つだけなんだが・・・

「迎えに来たわよく。荷物は・・・出来てるみたいね。」

ちょうど来てくれたようだ。

「はい。あらかたの荷物はまとめました。」

「じゃあ、行きましようか。」

「はい！」

じゃあ母さん、行ってきます

第四話 ようやく出来た自己紹介

く前回のあらすじく

親父はクズ。はつきり分かったね。

「そういえば、俺って何処に住むんですか?」

自分の家から紫さんの能力(後で知ったがスキマというらしい)で幻想郷に帰ってきた俺は、前から気になっていたことを聞いてみた、もちろん今日来たばかりの俺は家なんて持って無いし、家を借りるにしてもお金が足りないのでもここで自分で探せと言われると野宿するしかなくなるから、それだけは回避したいのだが……

「それならもう用意してるから、心配は要らないわ。」

良かった、どうやら野宿はしなくて良さそうだ。

「ところで、それって何処なんですか?」

多分、人里って所だろう。幻想郷の人間は殆どそこで暮らしてるらしいし。心配なのは近所づきあいだが、そこら辺は何とかして、あとは――

「博麗神社って言えば分かるかしら。」

家賃のことって……え?

「今なんて……?」

「だから博麗神社。貴方がルーミアに連れてこられたあの神社よ」

どうやら聞き間違えでは無さそうだ。なら、

「えっと、霊夢はどうなるんですか?」

まさかとは思うけど一緒に住むなんて事は……

「貴方と一緒に暮らしてもらおうわ。」

はい、終わった。これならまだ野宿の方が良かった。ん?何でかって?いや、だって自分と同じくらいの異性と一つ屋根の下で毎日を過ごすなんて、小学生ならまだしも高校生で、しかも思春期の真っ只中にいる俺にとってはもはや地獄である。

「紫さん、それ以外の選択肢は……」

「無いわよ。」

「さいですか・・・」

・・・よし、こうなったら部屋にこもってゲームやりまくってやる。それで出来る限りの接触を減らそう。いやーゲーム持つてて良かったら、これが無かったら今頃俺は絶望して――

「そういえば貴方の荷物の中の機械、こっち電気無いから使えないわよ?」

「いただろ・・・う・・・」

「オワツタ」

「え?」

「オレノジンセイハオワツタ、モウイキレナイ」

「え?え?どうしたの急に、そんなにシヨックだったの?」

「オレノキボウハナクナツタ」

「え?何してるのって包丁!?貴方止めなさい!れ、霊夢助けて!」

「何なの?こっちはあんたのせいで忙しい・・・って何であんたえいと・・・そいつの名前何だっけ?」

「そんなことはどうでもいいから、早く手伝って!」

　　少女と妖怪が拘束中

「えーまたもお見苦しい所をお見せしました・・・」

「全くよ」

はあくにしてもゲームが使えないとなると俺はどうしたら良いんだろう・・・

「まあ、そんなのはどうでもいいとして、」

「おい」

　　そんなのって何だよそんなのって

「あんた名前は?」

「へ?」

「だから、名前。あんた何だか言って名前言って無いでしょ。」
確かにここに来てから一度も名乗って無かったな。

「俺の名前は、青木　　審（あおき　　しん）。気軽に審って呼んでくれ。」

「じゃあ私も改めて、博麗　　霊夢（はくれい　　れいむ）よ。一応こ

の神社の巫女をやってるわ。」

「私は八雲　紫（やくも　ゆかり）。この幻想卿の賢者よ。」
「よろしく。」

今更だが二人とも変わった名前してるよな・・・

「さて、自己紹介も済んだことだし行くわよ。」

「?行ってくつてどこにだ?」

「あんた、これからうちで暮らすんでしょ?」

そうだった。俺はゲームも無い中これから・・・

「これからどうしよう・・・」

俺のSAN値もつかない・・・?

第五話 お金って大事だよね。

く前回のあらすじく

俺オワタ／＼(´o´)／＼

「ここがあんたが住む部屋ね。」

今俺は霊夢に案内されて自分がこれから住む部屋にいる。中にはある程度の生活用品が揃っているため、不自由はしないと思う。だが・・・

「やっぱ電気は無いのか・・・」

ゲームが出来ないのは辛い。

「あんたまだあれのこと言ってるの?」

「当たり前だ、お前俺がどれだけの金かけてあれを買ったか分かる?」

「知らないわよ。」

「5万3000円」

「5万3000円!?!」

俺が買ったのはどちらも中古の物なのでそこまで高くは無かったが、何せこちらは高校生のバイト。毎日休日にも出たりして一年かけてようやく買えたのに買ってから少しして使え無いなんて・・・正直精神的に辛い。

「あんた・・・本当なの?」

「ん?何がだ?」

「5万3000円のこと。あんた本当に自分で稼いだの?」
「勿論。」

あら?霊夢が震えてる。何で?俺何か怒らすような事したか?

「・・・ねえ。」

「ん?」

「今あんたお金持ってる?」

「まあ持ってるけど・・・」

「どれくらい?」

「ざっと2万円ぐらい」

「よくやった!!」

「痛い！」

霊夢にどれくらいお金を持つてるかと聞かれたから、素直に答えたら背中をおもいっきり叩かれた。酷い。

「これでこの貧乏生活から脱出出来る・・・!」

「?お前聞き間違えてないか?2万じゃ1ヶ月ももたないぞ?」

「は?何言ってるのあんた!2万もあれば一年は豪華な生活が送れるわよー!」

「・・・ちよつと何言ってるか分からない。」

何か話が噛み合わないから詳しく聞いてみると、どうも幻想郷は外の世界と隔離された明治時代のまもらしい。ちなみに明治で言う1円は今で言う1万円だから200000×100000=200000000つまり2億円を俺は持っているということになる。うん。霊夢があんなに喜ぶのも分かる。そりやそんな大金いきなりてにいれたら俺も滅茶苦茶うれし・・・ん?待てよ、こいつ、あくまでその大金を持っているのは俺なのに何でさも自分がてにいれたような反応してるんだ?・・・もしかして・・・

「なあ、舞い上がってる所悪いんだが」

「?」

「金はやらないぞ。」

「はあ?何言ってるの?一緒に住むんだからお金は共有でしょ?何か問題有る?」

「問題大有りだ!てか何かってに大事なこと決めてるんだよ。」

「別に良いでしょ、この家主は私なんだから。」

「よくないわ!!」

「はあ?そもそもあんたがここに住めるのは——」

「確かにそうだけどその金を稼いだのは——」

少年少女話し合い中

約2時間ほど話し合った結果、結局共有することになってしまった。その為

「ら、ららら」

霊夢はスキップしながら鼻歌を歌うほど機嫌が良く、俺は

「はあ~~~~（・△・）」

テンション駄々下がりで、今はテーブルに突っ伏している。

「二人とも〜元気にやって・・・何でこの部屋こんな空気重いのか?。」

紫さん。多分それ俺が近くにいるからです。

「あら紫。あんた何しに来たの?。」

霊夢が明らかに機嫌が良い声で言う。こいつ・・・覚えてろよ・・・

「貴女たちが上手くやってるか見に来ただけど大丈夫そうね。」

「一回けんかしましたけど?。」

「けんかするほど仲が良いじゃないの。」

「それは今回当てはまりません。」

「あら、そうなの?。」

絶対に紫さん分かってて言ってますよね?笑ってるし。

「とりあえず・・・はいこれ。」

そう言っつて紫さんが取り出したのは山ほどある札束。もしかして・・・

「これって2万円ですか?。」

「外のお金はこっちでは使え無いでしょう?。」

「確かにそうですけど・・・。」

こんな額のお金を用意出来るなんて恐るべし紫さん。と、そんなこと思っっていると

「私のお金~~~~」

霊夢が札束目掛けてダイブした。どんだけ金が好きなんだよ。というかこいつ俺の同居人だよな・・・

「これから大丈夫かな、俺。」

目の前の光景に若干の不安を感じつつも俺はこれからの生活が楽しみにするのだった。

第六話 嫌な事は重なる・・・と、思う

く前回のあらすじく

お金が・・・(遠い目)

霊夢をお金の中から救出したあと、俺は弾幕ごつこと言うものについて説明されていた。霊夢が説明したことを簡単にまとめると

- ・お互いが弾幕を作り出し相手に当てると勝利
- ・負けた相手は勝った相手の言う事を1つだけきく
- ・スペルカードと言う必殺技みたいなのがある
- ・回避不能な弾幕は禁止

の4つだ。弾幕はどの様な物か分からなかったので実際に霊夢に出してもらったのだが、当たったら結構痛い。まあ、そんな事はこの際どうでもいい。今大事なのは自分の能力についてだ、紫さんいわく「使いたい能力を持つてる人物を思い浮かべればいいわ」とのことなので思い浮かべてみる。因みに思い浮かべたのはアンダーテール(以後アンテと省略)のキャラクターのサンズだ。理由?カツコいいからに決まってる。異論は認めん。

く試すことしばらくく

「・・・特に実感は無いな。」

思い浮かべてから一分ほどたったが、これという変化は無い。もしかしてもう使えるのか?

「試しに「ガスターブラスター」」

俺がそう宣言すると、目の前に竜の頭蓋骨のような骨「ガスターブラスター」が出現した。(因みに大きさは、高さ40cm、横30cm、縦150cm位だ)しかし肝心の光線がでない。

「何かコツでもあるのか・・・?」

く試すことしばらく(本日二度目)く

試行錯誤の末、ブラスターの口?の中に力をためて一気に放出する、所詮ドラゴ○ボールのかめ○め波のような感じで光線を出せる事が分かった。因みに近道ショートカット(瞬間移動みたいなもん)は行きたい場所を思い浮かべると出来た。その他にも色々試したりしていたが、霊夢

に呼ばれたので一旦止めて霊夢の所に向かう。

「はい、これ」

「?なんだこれ。」

神社の中に入るなり霊夢に紙の束を渡された。

「スペルカードの紙よ」

どうやらスペルカードのための紙らしい。多分これに名前やらを書けば良いんだろうけど……

「何枚あるんだそれ?」

「70枚くらい。」

「70!?!」

いくらなんでも多いだろ。

「何でこんなに有るんだよ。」

流星にこんなに要らないと思うけど……

「だって紫が「彼はこれ位じゃないと足りないだろうから」って渡してきたのよ。」

紫さん、俺を何だと思ってるんですか。そして声真似上手いな。

「まあとりあえず頑張って作るか。」

「それ出来たら私の所にきてちょうだい。」

「了解」

く少年作業中く

「大体こんなもんだろ」

そういえば、外にこいって言われてたな……

「霊夢ー出来たぞ。」

「結構遅かったじゃない。一体何枚作ったの?」

「多分30枚くらい。」

「30枚!?!」

「まあ、他の人が使ってるのをパツ……参考にしたからな。」

「あんた今絶対にパツクたって言おうとしたでしょ。」

「さあ?」

「はあく……まあ良いわ。じゃあやるわよ。」

「?やるって何を?」

「弾幕ごっこよ。」

・・・はい？

「ちよつとなに言ってるか分からない。」

「あんたまだ一回もやって無いでしょ？だからいきなり襲われても死なないための修行よ。」

「・・・はあく。分かったよ。」

何かフルボッコにされる気がするけど・・・

「じゃ始めるわよ」

「了解。」

こうして俺と霊夢の弾幕ごっこが始まった。

ただ、霊夢はそのめんどくさそうな顔とは裏腹にえげつない量と密度の弾幕を放ってきた。

「初心者相手にやりすぎじゃないのか?」「骨壁」ボーンウオール」
俺は流石に避けられ無いと判断して骨で作った壁で防ごうとするも……

「いや、どんだけ威力あるんだよ!」「近道」ショートカット」

あまりの威力に壁が耐えれず弾幕が貫通してきたのでショートカットで霊夢の背後に回り込み、

「骨砲」ガスターブラスター」

ほぼゼロ距離からブラスターを放ったが

「これを避けるのか!」

霊夢はまるで分かっていたかの様にこちらを一切見ずに避けた。……最早人間止めてるんじゃないか?この巫女。

「ねえ……」

「ん?」

そんな事を考えていたら、霊夢が弾幕を出すのを止めて話しかけた。

「あんた、弾幕ごっこやるの初めてなのよね?」

「そりやもちろん初めてだけど……どうしたんだ?」

「初めてやるにしては動きがなれてたから。」

「あ……」

「心当たりがあるの?」

「あると言えばあるけど……」

「けど?」

「あんま言いたくない。」

「そう……なら無理をしてまで言わなくて良いわ。」

「ありがと、助かる。」

正直この話は本当に言いたくないから助かる。霊夢にも気遣いの精神があつて良かった。

「あんた、今失礼な事考えなかった?」

「いや、まったく。」

「こいつは心でも読めるのか？」

「とりあえず、そろそろ日も暮れるしご飯にしましょう。」

「了解」

「因みにあんた料理できる？」

「まあ人並みには。」

「じゃあ作って。」

「何でだよ。」

「疲れたから。それにあんた実質負けたみたいなものでしょ？」

「ちよつとなに言ってるか分からない。」

「食材なら台所の近くにあるから。」

「人の話を聞け。あと台所の近くって何だよ。」

「じゃあ頼んだわよ。」

「だから人の話を聞け。」

全く自分勝手だな・・・まあ良いか。どうせ料理作るの好きだからな。

「おつ夕焼け。」

俺も神社に入ろうとすると視界の右端に綺麗な夕焼けが目に入ったので少し眺めることにする。空気が綺麗だからか、はたまたもつと違う事でだからか、その夕焼けは今まで見てきた中で一番綺麗だった。

「ちよつとーなにしてるのー？早くご飯を用意しなさいい。」

「分かってるー」

どうも夕焼けに見とれて霊夢を待たせていたらしい。俺は少し駆け足で神社の中に入っていった。

「さて、始めるか。」

第八話 目覚まし時計は役に立たない事が多い。

く前回のあらすじく

ネーミングセンスを分けてくれー

「・・・知らない天井だ。」

少なくとも俺の部屋では無いな。えーと・・・そうだ、俺引っ越ししたんだった。

「にしても何か外が暗いな」

昨日夕焼けを見たのでてつきり晴れると思っていたが、どうも曇ったらしい。

「えーと今の時間は・・・8時丁度か。」

いつまでも布団にくるまっていてもしようがないので布団から出て今の時間を確認する。いつも6時には起きるように目覚まし時計をセットしていたのだが、色んな事がありすぎて疲れていた俺には効果が無かったらしい。

「まずは窓でも開けるか。」

俺は空気の入れ換えをしようとして窓を開ける。すると目に入っていたのは

「えっ？」

真っ赤な空だった。

「・・・流石幻想郷。」

そのあまりにもな出来事に頭の思考回路が止まりかけたものの、幻想郷だからと強引に納得した。が

「流石に幻想郷でもこんな事は無いわよ。」

流石に強引過ぎたらしい。後ろからスキマで現れた紫さんに否定された。

「紫さん、俺に何か用ですか？」

「貴方に話す事があって来たの。」

「話す事ってもしかしてこの空の事ですか？」

「そのとうりよ。今から説明するからよく聞きなさい。」

少年理解中

「大体こんなものだけど・・・分かったかしら？」

「何となくは分かりました。」

今、紫さんに説明された事をまとめると

・これは”異変”と呼ばれる異常事態である。

・この異変の犯人は湖の向こうの館に住む吸血鬼である。

・今からそこに行ってもらいその吸血鬼を倒してほしい。

の三つだ。にしてもまさかこっちに来てからたった一日でこんな事が起こるとは・・・

「じゃあ今から直ぐに準備をして、準備ができたらスキマで送るから声をかけてちょうだい。」

「分かりました。」

少年急いで準備中

えーと・・・スペルカードは持った。緊急連絡用のスマホ（紫さんが何故かスマホを持っていたので連絡先を登録した）も持った。他に持っていない物は・・・無いな。

「紫さん、準備出来ましたよ。」

「分かったわ。じゃあ、行ってらっしゃい♪」

「へ？」

紫さんが笑顔でそう言うのと地面にスキマが現れ、そのまま俺は落ちて行き

「またかアアアアアア」

ガン！

また頭から地面に落ちた。

「ま、前より痛い・・・」

何で足から落ちてるのに頭から激突するんだ？もしかしてわざとなのかあの人、じゃなくて妖怪。

「取り敢えず・・・これか、犯人がいる館は。」

にしても赤い。壁も扉もそこで倒れてる人の髪も全部が赤い・・・って倒れてる人!?

「大丈夫ですか?!」

俺は急いで倒れている赤髪の人に駆け寄り揺さぶるが返事が無い。
「脈は・・・あるな。」

恐らく気絶しているのだろう。にしても死んでいなくて良かった。
取り敢えず地面に骨を何本か置いてその上に寝かせる。

「さてと・・・気を取り直して行きますか。」

多分霊夢はもう既に中にいるだろうから、早く行かないと。

「おじやましま・・・す・・・。」

扉を開けて直ぐに目に入ったのは、大量ナイフが床に刺さっている
光景だった。

「何か・・・もう慣れたな。」

ここに来てから異常な事がありすぎて、もうこれぐらいの事だと驚
かなくなってしまった。慣れつつ怖い。

「取り敢えず適当に歩くか。」

く少年探索中く

「迷った・・・」

うん。これは別に俺が方向音痴という訳じゃなくて、この館にいる
妖精ぽいメイドのせいだ。集団で移動していて俺を見つけるや否や
「みんないけー」と叫んで弾幕をうって追いかけてくる。ただ、弾幕は
当たらないし、空を飛んでいるのに俺より遅いので逃げることで自体は
簡単なのだが、逃げた先にまた別のやつがいるので見つかる↓逃げる
↓撒く↓少ししてまた見つかるの繰り返しなので、最初の方は道を覚
えていたが、今では全く分からない。

「あ！侵入者はっけん！みんないけー!!」

『おぉー!』

「あぁーもう、またかよ。」

もうそろそろ疲れてきたから何処か休める場所は・・・って

「行き止まり!?!」

不味い、あの妖精ぽい奴らもすぐ後ろに来てるし、格なる上は・・・

「下に逃げるー!」「骨砲」ガスターブラスター」

俺はブラスターを床に発射し、出来た穴に飛び込み急いで骨で穴を
塞いだ。にしてもこんだけかいと地下の一つや二つ位あるだろう

と思ってやったけど上手くいって良かった。

「ようやくこれで休めるってん?」

ようやく休めると思った矢先、何か服を引っ張られたので振り返って見るとそこには、9〜10才位の赤に白のフリフリが付いた服を着て、頭に紫さんと同じような帽子をかぶり背中に綺麗な宝石が付いた羽を持った少女が立っていた。羽があるっていうことは、多分吸血鬼だろう。

「あなた誰?」

「俺?俺は青木 審。そっちは?」

「私?私は——」

「フラン。フランドール・スカーレットっていうの。」

第九話 無狂気の裏にある狂気

く前回のあらすじく

目と頭が痛い……。

「なるほど、フランか。じゃあフラン。何でこんなところにいるんだ？」

「私はね、ずっとここにいるの。ところでシンは何なの？」

「俺は真正銘人間だ。そう言うフランは吸血鬼だろ？」

「すごい！良く分かったね！」

「まあ、見た感じだけだな。」

にしてもこんなちっこいのが吸血鬼とはな。ただ、この異変を起こした犯人の吸血鬼では無さそうだな。さしずめ犯人の血縁者と言ったところだろうが……

「なあ、フラン。」

「なに？」

「あれって扉だよな。」

「うん。」

「じゃあ、何であんなに嚴重に閉められてるんだ？」

フランの後ろには鎖や鍵、そして魔法陣が使われてこれでもかど嚴重に閉ざされた扉があった。何故内側から鍵がかけられているかはどうでもいいとして、どうやら俺は地雷を踏みぬいたらしい。その証拠に先ほどからフランから尋常じゃ無い量の殺気が漏れだしてる。

「私がね色んな物を”破壊”するから、お姉さまがやったの。」

「外に出ないようにか？でもそれだと暇だろ。」

「うん。咲夜がもってくる”おもちゃ”もみんな直ぐに壊れちゃうから暇なんだ。だからシンはちゃんとタノシマセテネ？」

フランがそう言うや否や、俺に飛びかかってきた。あらかじめ警戒していた俺は、直ぐにその場から飛び退くことで回避する。

「やるしかないのか……。」

くBgm「U・N・オーエンは彼女なのか」(フラン戦Bgm)く

「ハハハ！さあ、アソビマシヨ？」「禁忌」グランベリートラップ」

「丁重にお断りさせていただきますよ！」「骨弾」ボーンガトリング」

フランの放ってきたスペルを俺も負けじとスペルで相殺しようとするが、何発かは相殺しきれずに煙の中から出てくる。それに混じってフランが猛スピードで俺に向かってきた。そして、

「禁忌」レーヴアテイン」

フランがそう言うと、フランの手に時計の針を歪ませたような剣？が現れ、切りかかってこようとするが、

「近道」シヨートカット、からの「骨砲」ガスターブラスター」

俺はシヨートカットで攻撃を避け、フランの死角からブラスターを放ち、命中した。しかし

「アハ、アハハハハ！やっぱりそうこなくっちゃ！」「禁弾」スターボウブレイク」

フランは直ぐに立ちあがり、更にはスペルを放ってきた。

「マジかよ!?」「骨壁」ボーンウォール」

フランが放ったレーザーをスペルで防ぎながら俺は何か解決策は無いのか考える。一応ブラスターは効いてるが、気絶させるには火力がたりない、なら逃げ回って少しずつダメージを与えようにも、そもそも人間と吸血鬼じゃスペック（身体能力）が全然違うから持久戦になると勝ち目は無い。かといってあれをやるのは気が引けるし、どうすれば――

「きゅっとしてドカーン」

「っておわー!?!」

俺が考えていると、いきなり壁が爆発した。

「隠れてないで私とアソビマシヨ？」「禁忌」フォーオブアカインド」

かと思ったら今度はフランが四人に分身した。そして

「禁忌」カゴメカゴメ」

「禁忌」恋の迷宮」

「禁弾」カタデイオブトリック」

「禁弾」過去を刻む時計」

その分身が一人ずつ別のスペルを同時に放ってきた。

「ったく。何でもありかよ・・・」

たった一つのスペルでも充分鬼畜なのに、それがいきなり4つも同時にきたら最早絶望である。こうなったらあれを使うしかないか・・・
「少し痛いかもしれないが・・・」

「「?」」」

「我慢してくれ!」
「開眼」ブルーアイ 「重符」重力操作」

俺がそう叫ぶと、フランたちが青色に薄く光だしそのまま

「「きゃ!!」」

地面に叩きつけられた。その衝撃でフランの分身は消え、フランたちが放ってきた弾幕も全て床に落下して消えている。

「な、何したの?」

「俺がしたのは重力操作、簡単に言えば重力に逆らえないようにしたんだ。」

フランはこの戦闘中ずっと少し地面から浮いていたので、それを逆手にとったのだ。ただ本家のサンズののように重力の方向を変えて相手を壁に叩きつけるようなことは出来ないのです、実はこのままだと何も出来ない。が、それでいい。

「なあ、フラン。」

「な、なに?」

「そんなに怖がらなくても何もしないから大丈夫だ。」

そうやって俺は笑って見せる。するとフランは安心した様子を見せたので、それを見た俺は重力操作を解除した。

「え?・・・何で?」

「だって、フラン。お前今は別に壊したくないだろ?」

「あ、ほんとだ・・・何で?」

「その前に確認したい事があるんだが・・・いいか?」
「うん。」

「まず一つ目、フランはここにいつから閉じ込められてるんだ?」

「んー。かれこれ495年くらいかな?」

「495年!?!」

ある程度長いとは思っていたがまさかそんなには・・・

「じゃ、じゃあ二つ目だ。フランの能力は何かを破壊できるものだと思うが、どうだ？」

「!!うん。私の能力は「ありとあらゆる物を破壊する程度の能力」なの。でも、どうしてシンは分かったの？」

「お前が骨の壁を壊した時にお前は手を握っただけだったからな、それだ。」

「やっぱりシンすごいね!私の種族も当てちゃうし!」

「いやあー、それほどでも・・・」

誉められるとやっぱり嬉しい。そして今俺をロリコンって言ったやつ出てこい。今ならガスターブラスター10発で許してやる。

「それで、もう聞きたいことは無いの?」

「あつそうだった。」

危ない危ない。危うく忘れるところだった。

「じゃあ三つ目。フランはどんな時に破壊したくなるんだ?」

「えーと・・・外に出たいって思った時かな?」

「なるほど・・・間違いないな。」

「間違いないって?」

「破壊衝動。」

「はかい?」

「破壊衝動だ。簡単に言えば他の感情、フランの場合外に出たいっていう感情だな、それを満たす為に何かを壊す。まあ、言ってみれば腹が立って何かものに当たるのと同じだな。」

「そうだったんだ・・・」

「ということ、行くぞ。」

「え?行くなって何処に?」

「決まってるだろ?外にだよ。」

「え!で、でもお姉様に・・・」

「大丈夫だよ。そのお姉様もフランが破壊するから閉じ込めたんだろ?だったら外に出れば良いと分かった以上、文句無いはずだ。」

「それでも・・・」

「なあ、フラン。お前はここから出たいか?」

「それは、もちろん出たいけど・・・」

「ならここから出る。それで誰かが反対してきても俺が倒してやるから、お前はここから出る。それがお前にとっての幸せだ。」

俺がそう言うのとフランは少しポカーンとしていたが、直ぐに満面の笑みになり、

「ありがとう!」シン兄様 ♪」

「え? シン兄様?!?!」

特大の爆弾を落とした。

第十話 決意を懐くのは大切だと思う。

く前回のあらすじく

爆弾投下

「フラン。お前・・・今何て言った？」

「えっと、ありがとう？」

「いや、その前のやつ。」

「シン兄様？」

「そう、それ。何で兄様がついてるの？」

「・・・駄目だった？」

「いや、あの、駄目って訳じゃ無いんだが・・・」

だからさ、今にも泣き出しそうな目で見ないでほしいんだ。すつごく心苦しいから。

「じゃあ良いよね！シン兄様♪」

「・・・もういいや。」

諦めよう。これ（上目遣い）には勝てない。

「さてと。・・・じゃあ、そのドア壊すから離れててくれ。」

「うん！分かった。」

とは言ったものの、頑丈そうな扉だし、壊せるかな？

「まあ、物は試し。やってみるか。「骨弾」ボーンガトリング」

・・・うん。びくともしない。

「だったら「速骨」ジェットボーン」

俺がそう言うと、先程の「骨弾」ボーンガトリングと比べものにならない速さで骨が飛んでいき・・・

「・・・・・・・・」

そのまま貫通した。破壊ではなく貫通したため、扉には少し穴が開いただけで、未だ扉は健在している。

「骨砲」ガスターブラスター」

「これで・・・」

壊れない。

「速骨弾」ジェットボーンガトリング」

「流石に・・・」

壊れない。

「・・・もう嫌だ。」

結局、フランの能力で壊してもらった。

？

「はあく〜」

「元氣出してよ。シン兄様。」

今、俺はフランと一緒に地下室から出て、館（紅魔館と言うらしい）の中を歩いている。

「いや、だって扉は壊れないし、妖精メイドはうざいし、道に迷うし、扉は壊れないし、片目だけ周りが青く見えて気持ち悪いし、目がチカチカするし、踏んだり蹴ったりだよ。」

「扉の事、二回言わなかった？」

「・・・ちよつと何言ってるか分かんない。」

はあく。せつかくいい感じにいったのに・・・人生そう甘くないね。

「にしても、さつきから凄い爆発音が聞こえて来るけど、大丈夫なのか？」

多分霊夢が戦ってるんだろう。

「大丈夫、つて何が？」

「ここ（紅魔館）の強度。」

下手したら崩落する可能性だってあると思うんだが・・・

「パチュリーが魔法で補強してると思うから、大丈夫だと思うよ。」
「パチュリー？誰だそれ。」

「お姉様の友人で魔女なの。」

「魔女ね〜」

「ここって魔女がいるのか。何かもう、何でもありだな。って、あれ？」

「なあ、フラン。」

「?どうしたのシン兄様?」

「何か音がこつち来てないか?」

「・・・!本当だ!」

「すつごく嫌〜〜な予感がするんだけど・・・」

「なあ、早くここから逃げ——」

俺がそう言いかけたその時、

ドガアアン

いきなり隣の壁から赤色の槍が飛んできて

「ベノム!!」

見事、俺の横腹に命中。そこで俺の意識は途切れた。

Game over

「決意」セーブ&ロード

?

「はあ〜」

「元気出してよ。シン兄様。」

「今」俺はフランと一緒に地下室からでて、館(紅魔館と”言う”
の中を歩いている。

「いや、だって扉は壊れないし、妖精メイドはうざいし、道に迷うし、
扉は壊れないし、片目だけ周りが青く見えて気持ち悪いし、一回”死
んだ”し、目がチカチカするし、踏んだり蹴ったりだよ。」

「扉の事、二回言わなかった？後、死んだって言ったの？」

「・・・ちよつと何言ってるか分かんない。」

「はあく。せつかくいい感じにいつてたのに・・・人生そう甘くないね。」

「？ねえ、シン兄様。」

「何だ？フラン。」

「何か音が近ずいてない？」

「ん、まあな。」

「確かあそこら辺のはず・・・」

「フラン、ストップ。」

「どうしたの？シン兄様。早く行こうよ。」

「まあまあ、そう言わずに少し待ってくれ。」

「・・・そろそろかな？」

ドガアアン

隣の壁から”あの”赤色の槍が現れ向かいの壁に突き刺さった。

「!!シン兄様、これって・・・」

「もし、あのまま歩いてたら100%当たってたな。」

「にしても、えげつない威力だな。あれが俺に・・・そりや死ぬ訳だ。」

「あれ？これって・・・」

「どうしたんだ？フラン。」

「これ、お姉様のだ。」

「ほう。」

まさかフランの姉・・・レミリアとか言うやつとは。流石吸血鬼、力が強いな。

「ということは、この槍が貫通してきた方向にいけば「ユルサナイ」良いつてフラン？」

何だろう、フランから殺気が・・・

「もし、シン兄様が気がつかなかったらシン兄様は死んでた、ふふ、つまりお姉様はシン兄様を殺しかけたんだ。ふふふ。」

「フ、フラン？」

ま、ま、ま。フランの目に光が宿ってない。

「フラン。落ち着こう。先ずはその剣を下ろすんだ。」

「シン兄様。私は落ち着いてるよ。だから、ジヤマシナイデ。」

「ア、ハイ。」

フランはそう言うと、壁を剣で壊し始めた。恐らく壁を破壊した方が早く着くからだろう。とりあえず、今の俺に言える事は一つ。

「待っててね、オ・ネ・イ・サ・マ。」

「レミリア、ご冥福をお祈りします。」

祈るだけだ。

一方その頃

ゾクゾクゾク。

「何かしら？いきなり寒気が・・・」

第十一話 悪戯はばれたときが怖い

く前回のあらすじく

フラン覚醒・・・？

「フ、フラン。お前のお姉さんもわざとでやったわけじゃないんだ。だからな、一回落ち着こう。な？」

「シン兄様。私は落ち着いてるよ？」

「だったら現在進行形で壁を壊すのを止めてくれないか・・・頼む。」

「・・・分かった。シン兄様がそこまで言うなら止める。」

「ありがとうな。」

俺はそう言つて頭を撫でる。

「えへへ♪」

フランはいきなり撫でられて少し驚いた様子だったが、直ぐに嬉しそうな顔に変わる。そして

「シン兄様大好き!!」

俺の腰辺りに抱きついてきた。本来なら滅茶苦茶嬉しいんだろうが、ここで少し考えてみよう。フランは吸血鬼、当然力が人間の比じゃない。そんなフランが全力とまではいかないものの、それなりの力で貧弱な体の俺に抱きつく。・・・ここまで来れば分かるだろう。つまり今の俺の腰は

「フ、フラン、離してくれ痛い。」

ゴキゴキと不穏な音を立てて、今にも砕け散りそうな状態である。

「あ、ごめんなさい・・・」

と言つて、フランは手を離してくれた。これで俺の腰が砕け散る事は無くなったが、今度はフランが元気を無くしてしまった。

「フラン、俺は別に気にしてないからそんなに落ち込まないでくれ。」

「本当？」

「ああ、勿論本当だ。こう見えて実は体は丈夫だしな。」

そう言つて、俺は自分の肩を叩いて見せる。事実、事故して車に吹

き飛ばされた事があるが、その時も軽傷だった。

「そう？なら良かった！」

うん。やっぱり笑ってるほうがフランには似合ってる。．．．ん？
笑顔じゃないほうが良いやつなんているのか、だって？．．．勘の良いガキは嫌いだよ。

「にしても、凄い音だよな。」

レミリアの赤い槍（グングニルと言うらしい）が壁を貫通したおかげで壁に穴が開き、戦闘音が全て筒抜けになっている。

「うん。でも、音が激しくなってきたから、もう直ぐで決着がつくんじやないかな？」

「成る程ね．．．だったら、今から向かってても巻き込まれるだけ．．．いや、でも霊夢が勝つとは限らないし、そうなってくると俺が行かないといけないし、うくん．．．」

はてさて、どうしたものか．．．

「ねえ、シン兄様。」

「ん？何だ？フラン。」

「ここからお姉様とそのレイム？っていう人間と、あと白黒の服を着いた人間が戦ってるのが見えるよ。」

そう言っつて、フランが見ているのは、あの壁に開いた穴。どうやらそこから霊夢、白黒のだれかVSレミリアの戦闘弾幕が見れるらしい。

「どうなってる？」

「うくん．．．お姉様の方が押されてるかな？」

「そうか。」

なら、俺が行く必要も無い．．．けど何かこのまま終わるってのもなく．．．あ、そうだ。

「なあ、ちよつとそこ変わってくれないか。」

「うん、分かった。」

さてと。

「お、やってるな。」

えくと．．．霊夢に、白黒の（箒に乗ってるから多分）魔法使いと、
「なあ、レミリアって、あのピンク色した服を着いた水色の髪の毛の？」

「そうだよ。」

「成る程ね・・・」

にしても凄い戦いだな・・・

「ねえ、シン兄様」

「ん？何だ？」

「さつきから何するつもりなの？」

「いや、ちよつとした仕返しをな。」

内容は簡単。「重符」重力操作を飛んでいるレミアアに使って床に叩きつけるだけ。簡単でしょ？

「でも、本当にそんなことで良いの？どうせなら私が・・・」

「大丈夫。多分だけど凄いことになるから。だからなフラン、とりあえずその剣みたくないやつから炎を出すのをやめてくれ。」

「でも・・・」

「頼む。」

「・・・分かった。」

よし。フランの目に光が戻ってきた。

「じゃあ、気を取り直して・・・」「重符」重力操作つと。」

さて、どうなるか・・・って綺麗に着地した、したんだけど・・・「容赦なくぼこぼこにされてるなな・・・」

本当に容赦無いなあ。二人。飛べなくなつて機動力落ちてる相手に、極太レーザーと夢想封印（しかも俺の時よりも威力高い）を、なんの躊躇も無くぶつけるって・・・良いぞもつとやれ。

「わあ・・・お姉様がボロボロになつてる。」

煙が晴れると、見るのも無惨なレミアアぶつ倒れていた。多分死んでないと思う。・・・死んでないよね？

「おっ起き上・・・がっ・・・た・・・」

えくと、何でこちらを向いて睨んでるんでしょう・・・

「シン兄様、もしかして・・・」

「ああ、その通りだ。」

こんなときにする行動はただ一つ。

「フラン、逃げるぞ!!ショートカット!!」

逃げるんだよーー!!

第十二話 自業自得?なにそれ美味しいの?

く前回のあらすじく
逃げるんだよー!

「うおおー……!!」

動け俺の足!陸上部の意地を見せろ!

「……」

まずいよ、もう完全にキレてるよ、その証拠にさつきからひと言も喋って無いよあの吸血鬼。お願いだから喋ってよ。怖いよ。

「神槍」スピア・ザ・グングニル」

って喋ったけど……

「それ、意外とトラウマだから止めてくれませんか?!」「近道」シヨートカット!」

因みにフランだが、今は居ない。なぜだか一緒に逃げてた筈なのに気付いたら居なくなっていた。正直、凄く心配だ。

「って考えてる場合じゃ無いな、これ。」

何か打開策を考えないと。全く、近道ショートカットで離れた場所に逃げても直ぐにまた見つかるから気の休まる時間が無い。てか……

「いくらなんでも早すぎやしませんかね?!」

流石に壁を壊しながら来るとは思わなかった。にしてもおかしい。壁を壊しながらとなると、俺のところまでは一直線に来なければ無く、勿論そのためには俺の場所がある程度は把握しなければいけない。つまり、こいつは何らかの方法で俺の位置を把握していることになり、

「つまるところ、逃げてても無駄って事だなこりゃ。」
さて、どうしたものか。

「……」神罰」スターオブダビデ」

レミリアがそう唱えると、大量の赤い弾幕が俺に向かってくる。にしても神罰って、まさしくこの状態にぴったりだな……って

「そんなこと考えてる場合じゃねえ!!」「骨壁」ボーンウォール」

ヤバイ。あいつ、冗談抜きで殺しにかかっている。後少しでもスペルを出すのが遅かったら間違いないく殺^やれてたぞ、俺。

「こうなりや一か八かあれを・・・」

いや、でも失敗したら間違いなく俺は終わる・・・

「つて、うおああああ!!」

レミリアが、俺の動きが止まったのを見計らってあの槍をなにも言わずに放ってきた。

「クツソ、こうなりややけくそだ!! 「拳骨」骨落とし（全力）！」

流石に身の危険を感じた俺は、相手の頭の上に骨を出現させ、そのまま落とすスペル、「拳骨」骨落としを使う。これで、あいつが気絶してくれたらセーフ。問題はあいつが気絶しなかった時、俺の人生は終わってしまう。さて、どうなるのか・・・

ゴン!!

俺が腕を降り下ろすと同時に鈍い音がして、

「う、う~~~~」

レミリアが頭を抱えながら床に落ちた。良かった、どうやら賭けに勝ったらしい。ただ・・・

「疲、れ、、、た、、、」

ドサツ

どうやらここに至るまでに、俺は相当体力を削っていたらしく、緊張が解けると同時に体を襲ってきた倦怠感と疲労感に耐えきれず、そのまま俺は意識を手放した。

~~~~~

目を覚ますとフカフカのベッドの上に寝ていた。

「・・・知らない天井だ。」

うん。少なくとも俺の部屋や、神社の天井はこんなに赤くない。

「えくと、確か昨日は・・・」

・・・あ、思い出した。

「つてことは、ここは紅魔館か。」

窓の外からは、青色の雲一つ無い空が見えているから、どうやら異変とやらは終わったらしい。

「にしても体が痛い・・・」

昨日、無理した結果だろう。体中の筋肉——特に足の辺りが死ぬほど痛い。

「また寝るか・・・」

この状態では、歩けたとしても、そのうち倒れるだろうから、もっかい寝ることにする。それに俺、寝るの好きだし。

「よいしょ、つてん？」

何か・・・寝返りを打とうとしたら左手に重みを感じられた。

「・・・」

左手の方を見ると、高そうな掛け布団の一部分が盛り上がっており、少しだけ上下に動いている。

「・・・」

意を決して布団を捲ってみると、

「何でここにいるんだ？フラン。」

俺の左手を握って、気持ち良さそうに寝ているフランが居た。

「・・・」(本日三回目の沈黙)

俺が状況を飲み込めずにしばらく唾然としていると、

パシヤ、パシヤパシヤ

「あ?」

何かカメラのシャッター音みたいなのが聞こえたので窓を見てみると、黒いカメラを首からぶら下げ、手にはメモ帳とペンをもった女性の・・・人じゃないな、えくと・・・なんか鴉みみたいな羽が背中から生えてる人物がこちらを見ていた。・・・ん?待てよ、カメラにペン、メモ帳つてことは・・・

「そのカメラやよこせー!!」

こいつ、絶対記者か何かだ！

「（　　△△）」

俺はカメラを奪おうとフランを起こさないように、なおかつできる限り早くベッドから降りて窓に向かうも、相手は室外。相手も煽るように、俺が目の前に来るまで笑顔で窓の前において、俺が近づいたら凄じスピードで逃げていった。

「クッソ、あいつ……」

次会ったらぶん殴ってやろう。

「……寝るか」

今ので体も痛さが増したし。俺は、今度もフランを起こさないようにベッドの中に入った。すると、直ぐに眠気が来て、俺は意識を手放した。

「新しく来た外来人はロリコンだった!?これは良いネタができましたね。ふふふ……」

そのころ、カメラを見ながら独りで笑う烏天狗が居たとか居なかったとか……

## 第十三話 鴉つて美味しいのかな？（真顔）

く前回のあらすじく

知りたいなら前回のを見やが（殴）（。）（。）（。）（。）（。）

「・・・さま・・・」

「しん・・・い・・・ま・・・」

ん・・・何かうるさく——

「シン兄様!!」

「ふわあ!」

な、何事?!

「良かった、やっと起きてくれた・・・」

俺が気持ちよく寝ているというのに、誰かが大声で起こしてきた。声のした方を見ると、俺のの隣で寝ていたはずのフランがいつの間にか起きて俺を揺さぶっていた。

「フラン? どうしたんだ? そんな安心した顔して。」

「シン兄様が全然起きてくれないから心配したの!!」

「そうか、ごめんな、心配かけて。」

「えへへ♪」

まあ、これで起こした奴がフラン以外だったら、間違いなくキレてたな。・・・ん? 何でフランだと怒らないのかだつて? だってこんな純粋な少女に対して怒る気ならないからだ。そして今、俺のことを口リコンと言った奴は出てこい。ガスブラ10発で許してやる。

「にしても、いつの間にフランは起きたんだ?」

もうめんどくさいから同じ布団に居たことはスルーするとして、俺の記憶が正しかったら、少なくともマスゴミが来た時は寝てたと思うけど?

「んく・・・多分、一時間くらい前かな? それで、シン兄様も寝てて、廊下を歩いてたら咲夜に会って「妹様、今すぐシン兄様とやらを連れてきてもらえますか? 少しお話しをしないとイケませんので」って言われたんだけど、その時の咲夜が顔は笑ってるのに目が笑って無く

て、何だがすごく嫌な予感がしたから急いで知らせなきやと思つて・・・」

「それで必死に俺を起こしてたと。」

「そのとうり。」

なるほどねえ・・・でもな、フラン。

「なあ、フラン。」

「?どうしたの?シン兄様?」

もう、既に

「その咲夜って人、銀髪でメイド服を着て、大量のナイフを持ってたりする?」

手遅れだったみたい。俺にはフランの後ろにいる銀髪メイドさんが修羅にしか見えないんですよ。ハ、ハハハ・・・俺、オワタ／＼(〇)／

「・・・とりあえず、死ねロリコン。 ザ・ワールド」

「何故に!?そして俺はロリコンじゃない!!ショートカット!!」

ヤバイ、銀髪メイド改め咲夜さんがいきなり初対面で「死ねロリコン」って罵倒してきたと思えば、マジもののナイフを投げってくるんですけど!?しかも、的確に首やら目やら手の甲やらの弱点を狙ってきてるし、普通にあのまま何もしなかったら死んでたよ、俺。

「!?何で貴方が動けるの?」

「?動ける?」

ふと回りを見てみると、さつきまで俺が居た所にナイフが浮いている、というよりかは止まっていた。そして、フランが微動だにせず呼吸音さえも聞こえない。

「時間停止か・・・」

「ッ!」

この事から考えれるものとなれば、これしか思い浮かばない。正直、自信はなかったのだが、あの反応を見る限り当たっているだろう。

「まあ、とりあえず・・・」**「骨箱」** ボーンボックス」

これ以上何かされると面倒・・・というか命の危険があるので、咲夜さんの回りを囲うように骨の壁を出す。因みにスペルの名前を

言ったのはただの気分だ。

「貴方、今すぐここから出なさい。さもないとこのナイフで……」

「いや、このナイフって言われても、骨で隠れて見えません……」

天然なのかな？この人。

「……」

「……とりあえず。」

「あ、話変えた。」

「何故、貴方が妹様と一緒にベッドに居たか、しっかりと話してもらいましようか。」

「話しますから。話しますからその壁越しても分かるほどの殺気を納めてください。」

この人、怖い……

少年説明中

「と、いうことがあったからであって、俺は決してロリコンじゃありません。」

「……本当に？」

「本当に。」

「じゃあ、自分から誘ったわけでもなく、いかがわしいこともしてないのね？」

「してません。！」

「本当に？」

「だから本当です！」

「……分かったわ。貴方を信じる。」

「良かった……」

「但し、これから先、もしそんなことをした日には……分かってるわよね？」

「わ、分かりました……」

咲夜さんがナイフをちらつかせながらそう言う。ちなみに「骨壁」は説明してる間に外した。



「にしても、あの鴉も紛らわしいことを書いて・・・」

ん？咲夜さん。今、あなた何て言いました？鴉？

「あのく咲夜さん。」

「何？」

「さっき言つてた鴉つて・・・」

「鴉天狗のことよ。」

「鴉天狗？」

「そう。ここから少し離れた山——妖怪の山つて言うのがあるのだけど、その烏天狗の一人が新聞を作っているのよ。それで、いつもはうちは新聞を取っていないのだけど、ついさつきその烏天狗——射命丸 文が「号外です」って新聞をほぼ無理矢理渡してきたのだけど・・・」

「その新聞に俺とフランがベットでいる写真があつたと。」

「新しく来た外来人はロリコンだった！という見出しと一緒にね。」

「なるほどねえ・・・」

間違いない。絶対にあのマスコミ——いや、マスゴミの仕業だ。なら、そうと決まれば・・・

「あの、咲夜さん。この料理つて普段どうしてます？」

「私と妖精メイドで毎日作ってるけど・・・」

「なら、今日の夕食を作るときに一緒に使つて良いですか？勿論食材はこちらで用意して、迷惑もかけないようにしますよ。」

「別に良いけど・・・今日は宴会だから、ある程度の量は要るわよ？」

「大丈夫です。というかそつちの方が都合が良いですね。」

「そう。なら良いのだけれど、いったい何を作るの？」

「んく・・・宴会ならお酒を飲むでしょうし鳥の唐揚げだったり焼き鳥だったり、手羽先・・・は、天狗だしないか。となると他には「ちよつと待ちなさい」？なんですか？」

「貴方今、天狗つて言つた？」

「え？まあ、言いましたよ？」

「・・・もしかして、あの鴉を食べるつもり？」

「勿論ですよ。なんせ、偽の情報をばらまいて俺の社会的地位をどん

底に突き落としたんですから、それくらいの罰は受けてもらわないと・・・咲夜さんもそう思いますよね？」

「え!? え、ええそう思うわ。」

「ふふふ。冗談ですよ。だからそんなに怖がらないでください。結構心にきますから。」

「そ、そう。なら良かったわ。(でもあの目は本当に殺ろうとしてた目だったけれど。)」

「まあ、次あつたらただじや済ましませんけど。」

「・・・とりあえず、時間停止を解くわよ。」

「分かりましたー。」

さーて、宴会に来るといいな。あのマスゴミ。

一方その頃

ゾクゾクゾク

「何でしょう? 急に寒気が・・・風邪でもひいたのでしょうか?」

自分の命の灯火が消える直前だったことも知らない、呑気な烏天狗が居たそう。

## 第十四話 急に見た目を変えると何かと不便だよね

く前回のあらすじく

さて、どうやって料理しようかなく・・・

うつそうと繁る木々、上から照りつける太陽。俺は今、妖怪の山に  
来ている。理由は・・・勿論あの鴉に「お話し」をするためだ。と、言  
うわけで、さつきからひたすら歩いているが、えくと・・・確か白浪  
天狗とか言う見張りがうざい。さつきからいきなり出てくる↓鴉の  
場所を聞こうとする↓俺の姿を見る↓とたん怯えて逃げる、の繰り返しだ。  
正直見ている腹が立つ。確かに、全身真っ黒で所々溶けてるよ  
うな奴は怖いと思うが・・・ん？何で全身真っ黒で所々溶けてるのか  
だって？そりゃ虫対策に決まってるだろ・・・あく真面目に答え  
ると、こいつはアンダーテイルAUの一つであるドリームテイルの  
キャラクターのナイトメアサンズの体質を真似した結果だ。知らない  
奴は・・・まあ、簡単に説明すると、体が黒い液体であらゆる形  
に変化可能(普段はサンズと一緒にの形をとっている)、命が999個あ  
る為に実質不死身。この二つを覚えてればいい。ちなみにここに来  
る前に、出来たら良いなく、という感じでやったらできた、多分身体  
”能力”って言うことなんだろう。そこら辺は自分でも分からん。に  
しても、どうも性格も真似した奴に引っぱられるらしく、さつきから  
口調が変わってるのが分かる。

「おい！貴様!!」

「あ?」

しばらく歩いて、またあの見張りのわんころが来た。またどうせ逃  
げるだろと思っていたが、他のやつより度胸があるようで、俺をみて  
も逃げ出さない。

「ここは天狗の領域。部外者は今すぐ立ち去れ。立ち去らぬ場合は排  
除するぞ。」

「ああ、実はその事についてだが――」

「問答無用。立ち去らぬのなら、切る!」

「はっ？」

ようやく鴉の場所を聞けると思っていたが、あてが外れた。にしても、普通初対面で切りつけてくるか？

「痛くは・・・ないな。」

右腕を切り落とされたがすぐに再生させる。しかも、体が液体なおかげか、切られても痛くない。むしろ再生させる時の感触の方が気持ち悪くてつらい。

「なッ!？」

おー、驚いてやがるな。動揺してるし、今なら行けるか？

「なあ、さっきのこも」ならばこれなら！レイビーズバイト！」人の話を聞け。」

今度は弾幕を張ってきたが、これも当たっても痛くないし、すぐに再生できるので、俺からしたら先程のとたいして変わらない。

「これでもダメか・・・」

「当たり前だ。俺には物理攻撃が効かない。つまり、お前に勝ち目は無い。」

「なんだと!？」

こいつ、反応が良いな。打ったら響く奴か。

「と言うわけで、一旦まずは俺の話をk」あややや？何だが戦闘の気配がしたと思ったら、権でしたか。どうしたんですか？」お前らは人の話を聞け。」

ようやくあの鴉の場所を聞けると思ったが、その必要は無いらしい。ちようど、その鴉がネギ背負ってきやがった。

「文さん。実はこの侵入者が立ち去らないので排除しようとしたのですが、攻撃が効かないんですよ。」

「なるほど・・・とこころであなた、ここらでは見たことないですが、いったい何のためにここに?」

「いや、少しある人物を探してな。ここが天狗の領域だとは知っていたが、許可を取るついでに道を教えてもらおうと近づいたら逃げられるし、逃げないと思って聞こうとしたらいきなり襲ってくるし、でな。」

俺はそう言っつてわんころ改め権と呼ばれた方を横目で見る。

「権・・・貴女またいきなり切りかかったんですか・・・」

「うう、すみません・・・」

「まったく、今回は相手が無傷だったからいいものの、怪我でもさせたら上に怒られるのは私なんですからね？もうこれ以降やらないように。」

「はい・・・」

どうもマスゴミは権の上司らしい。ひとしきり注意をした後、こちらのほうに向いて、

「この度は、うちの部下がご迷惑をおかけしました。」

「いや、たいして気にしてないから大丈夫だ。」

「いや、そう言うわけにはいきませんので、その貴方が探している人物についてなにか教えてくれませんか？もしかしたら私が知っているかもしれませんし。」

「そいつは助かる。そいつは俺を命の危険にさらして、尚且つ社会的に抹殺したやつでな、色々【お話】をしたいんだよ。」

「いろんな意味でな、

「な、なるほど・・・」

「まず、種族は烏天狗だ。」

目の前の烏天狗に一步近づく。

「だからここに来たんですね。」

「で、性別は女。」

気付かれないように背中中の触手を相手の背後に伸ばす。

「そして新聞記者をしてる。」

「!?そ、そうなんですか・・・」

更に、少しずつ足元に自らを溶かした液体を張り巡らせる。

「で、どうも幻想郷最速らしい。(咲夜さん情報)」

「・・・」

目の前で冷や汗かいて、黙りこんでる烏天狗に更に近づく。

「で、いつもカメラを持ち歩いてるらしいな。」

目の前の首からかけられたカメラを触りながらそう言うと、危険を

察知したのか逃げようとしたので用意した触手と地面から伸ばした手で拘束する。そして、身動きのとれないマスゴミに限界まで顔を近づけ、満面の笑みで

「心当たりあるよな？ 烏天狗で、記者で、幻想郷最速の射命丸 文さん？」

この後のことは・・・ご想像にお任せする。

「なあ、これはあそこにおくんだな？」

「ええ。後、ついでにこれとこれも持って行って。」

「了解。」

俺はあのマスゴミと【お話】したあと、紅魔館で宴会の準備を手伝っている。何故神社ではなく、紅魔館なのかだが、実はこのナイトメアの状態を解こうとしたのだが何度やってもできず、結局そのまま一度神社に戻ったが、霊夢に妖怪と勘違いされて襲われたので急いで紅魔館に逃げてきた。ちなみにだが、紅魔館勢でも俺を判別できたのはフランだけで、フラン曰く「シン兄様のおいがした」とのことらしいが・・・吸血鬼って鼻がいいのか？

「それにしても、その触手？ 便利ね。」

「ん？ まあな。」

いくら動かしても疲れないし、何より離れた場所にある物を動かすに取れるのは楽でいい。

「にしても、どんだけ酒があるんだ？ さつきから日本酒やらワインや

らのアルコールしか運んでないが・・・」

えー、俺の触手が6本で5回運んだから30本、更にそれが後3回だから90本・・・多いな。

「お嬢様が「運命を見た」って仰ってお酒をありつたけ用意するように言われたからよ。」

「成る程ね。」

たしか、「運命を見る程度の能力」だったか、俺も使える筈だから暇なときでも試すことにしよう。

「ほら、ちゃんと手を動かさない。」

「了解。まあ、動かすのは触手だけだな。」

と、色々雑談することしばらく、

「ようやく終わったか。」

「そうね。」

まあ、ようやくって言っても動かしたのは触手だからそんなに疲れてはいないが。

「じゃあ、俺はフランの所に行くか。」

「そう。宴会が始まるのは一時間後だから、それまでにはちゃんと来てね。」

「ん、了解。それじゃあな。」

俺は近道ショートカットでフランのいる部屋に移動する。

「よう、フラン。さっきぶ「シン兄様!!」・・・もう諦めよ。」

俺を見つけるや否やフランが俺の腹にダイブした。が、今の俺は液体。つまり、

「フラン、俺の体に突き刺さってるぞ。」

まあ、こうなるよな。

「気にしないから大丈夫!」

「いや、俺が気にするんだが・・・」

「ダメ?」

「・・・少しだけだぞ。」

「やった!」

はあ〜。俺も甘いな・・・

ちなみに、このあと何だかんだで宴会までフランは俺の体に刺さったままだった。

おまけ　マスゴミとの【お話し】

審「で？何でんなんな記事を書いた？」

マスゴミ「そ、それは・・・」

審「言えないのか？あゝ？」

マスゴミ「ひッ！・・・」

権「(こ、怖い・・・)」

このあと、【お話し】は3時間続いた。



## 第十五話 自分のことって意外と知らないよね

く前回のあらすじく

そんなに別人に見えるか？

「もう帰りたい・・・」

右も左も酔っ払い。控えめに言って地獄だ。

「こんなことならでなきや良かった、宴会。」

普通、宴会とは楽しい筈だ。なのに、俺がこの宴会で感じたのは、

「待ちなさい!!このタコー!!」

「だから俺の話を聞け!後、俺はタコじゃない!」

まず、霊夢の誤解を解くことによる疲労、

「この間、外から来た青木 審だ、宜しくな。」

「へえ・・・貴方タコみたいで美味しそうね。食べていい?」

「駄目ですよ幽々子様、あんなの食べたらお腹を壊します。」

「あんなのって・・・」

次に、初めて会う人への挨拶をしていた時の言葉による精神的ダメージ、

「ようやく終わった・・・」

「お疲れ様。」

「これでようやく料理にありつける・・・」

「貴方、消化機関が無いその姿で食べれるの?」

「あ・・・」

更にようやく食べれると思った料理が食べれない、と知った時の絶望感、

「イエーイ!!汚物は消毒だぜ!!」恋符「マスターパーク!」

「はあ?!?」

そして、酔っ払った白黒エプロン(魔理沙という名前らしい)による汚物消毒(物理)。の、楽しさからかけ離れた内容になっている。ただ、なにもそんな悲しいことばかりではなく、フランと、何気に俺が初めて会った妖怪のルーミアが楽しそうに話してるのを見ると、

なんとというか微笑ましくなってくる。ほんと、純粹なのはいいことだな。

ちなみに、ルーミアの近くに居た青やら緑やらのやつらは俺を見るなり逃げた・・・前言撤回、やっぱ泣きたい。

「にしても腹が減った。」

この体、食べれないくせにちゃんと腹が減る。まあ、朝からなにも食べてないのを考えると普通の時よりは減りにくくはなってるんだろうが・・・

「……………」

ふと、前に見た画像で、ナイトメアが自分の触手を食べているの思い出した。いや、いくらなんでも自分の体の一部を食べるのは流石に：でも、空腹なのも辛いし、いつこれが解けるかわからないし：「少しだけ、少しだけなら、」

先端をかじってみる。

「……………」

甘い。こんなにもどろどろして、いかにも不味そうなのに甘くて美味しい。例えるなら生クリームとチョコを混ぜたみたいな味だ。ただ、

「おい、その白黒エプロン。」

「なんだ？？私にはちゃんと霧雨魔理沙という名前gむぐう!?んー!!んー!!んー……………ガクッ」

どうやら、俺以外が食べたなら不味いらしい。仕返しついでに白黒エプロンの口に突っ込んで食わせたら顔を真っ青にして、泡を吹いて倒れた。

「ねえ、魔理沙って魔理沙!?あんた大丈夫!?誰かー、ちよつと来てー!」

「忙しそうだな、霊夢。」

「その忙しい原因を作ったのはあんゝむぐ!!んー!!んー!!ん……………チーン。」

ついでに霊夢にも振り向いた時にねじ込んでみたが、同じように、泡吹いてぶっ倒れた。

「どうしたんですか？ってえ!?! 本当にどうしたんですか!?!」  
「……………」

「ちよつと！なにするんですkうぐ!ん・・・ガクツ」  
「なんだか楽しくなってきたので、俺に「あんなの」と言ったあの白髪にも無理やり口のなかにねじ込んでやった。」

「ようやく楽しくなってきた。」

俺にSの趣味は無いはずなのだが、さつきから人が苦しんでいるのを見てると楽しくなってくる。多分、この姿に引つ張られてるんだろう。

「さくて、次は誰にやってやろうか……………」

ちなみに、その次の日の朝早く、気絶してた（理由は察せ）鴉天狗は紅魔館の地獄絵図を見たあと、

「あれぐらいですむならまだましですよ。私なんか四肢を固定されて……………ああ、思い出しただけで寒気が……………」

と、ひとりで震えてたとかなんとか。

一方、審が宴会で暴れてるその時……………

### 紅魔館の天井の上

「ねえ、紫。」

「あら、幽々子じゃない。どうしたの?」

「少し聞きたい事があったね。」

「いつになく真面目ね。で、聞きたいことって?」

「二日前に貴女が連れてきた彼についてよ。」

「彼がどうしたの?」

「とぼけないでちょうだい。」

「……………」

「彼が持つてるあの能力・・・あれは人間が持つには過ぎた力。本来ならその負荷に自らの魂が耐えられず死に至る。」

「・・・」

「更に、あくまでもこれは彼の能力だけ考えたときの話。彼の能力は「自分の記憶にある人物の能力を」得る」程度の能力」つまり彼は相手の能力を自らも獲得する。言い換えれば、その分だけ彼の魂には負荷がかかるということ。そう考えると、尚更人間の魂が耐えられる訳がない。」

「・・・それで？何が言いたいのか？」

「彼は本当に人間なのか、ということよ。」

「・・・彼は人間よ。ただ、少し特別なだけな。」

「そう・・・貴女がそうしておきたいのなら私はとやかく言うつもりはないわ。ただ、これだけは言わせて。」

そう言うとき幽々子はよりいっそう真剣な顔になり、

「彼が人間であれ何であれ、あまり個人に想い入れしない方がいいわよ。」

「肝に命じておくわ。」

「警告は・・・したわよ。」

幽々子が去ったあと、

「想い入れしないわけじゃないじゃないの、だって彼は・・・」

「私が造り出してしまったんだもの・・・」

その時の紫の顔はひどく寂しげだった。

## 第十六話 モフモフは正義、異論は認めん

く前回のあらすじく

まだましですよ、あれぐらい……

「眠たい……」

「なら寝ればいいじゃない」

「生憎、俺は空中で寝れるほど俺は器用じゃないからな」

そもそも、空中で寝たら地面に落ちるだろ。

「あんたはそれに乗ってるから大丈夫でしょ」

「当たり前のように心を読まないでくれ。後、俺が寝たらこれも消えるぞ」

ちなみにこれとは「骨 砲」ガスターブラスターのことで、今俺はそのガスブラに乗って霊夢と一緒に人里に買い物に行く途中だ。

「にしても本当に眠い。なあ、買い物行くの明日にしないか？」

昨日の宴会で遅くまで起きてたからあまり寝れてないんだよ。

「駄目よ、そもそも寝れてないのは自業自得じゃない」

「お前らが寝てる間に俺は一人で空き瓶だったりを片づけてたせいで寝れてないんだけど？ 後、いい加減に心を読むな」

「私たちが寝かした（物理）犯人がよく言うわね。」

「その前に、俺を見るなり追いかけて回してタコと罵ったあげく、夢想封印を撃ってきたのは誰だったけ？」

「あら、そんなに嬉しかったならもう一度受けてみる？ 今ならダメー  
ジ入りそうだし」

「だったら、もう一度寝てもらうだけだけど？」

「ガールルル……」

「グルルル……」

と、雑談？ すること10分程。

「ここが人里か」

人里に到着した。なるほど、なかなか良さそうな場所だな。建物は全部木造だし、人は着物を着てる。にしても……こうしてみると

本当に明治時代のままという事がよく分かるし、同時に二度とゲームは出来ないという事も分からされる。ゲーム出来たらなあ……

「さっさと行くわよ」

「りよーかい……ハアア」

「なんでいきなりテンション低いのよ」

「こういう時こそ心を読んでよ……」

「はい、毎度あり〜」

「ありがとう。さてと、次はお肉屋さんに行くわよ」

「……なあ、霊夢」

「何？」

「なんでこんな大量に買いだめするんだ？」

俺の両手に持つてる袋には溢れんばかりの野菜やら魚やらが入っているし、袋に入りきらない分は俺の骨で作った箱に入れて背負っている。普通に重い。

「里の経済を回すため」

「本当は？」

「いちいち降りてくるのがめんどくさいから」

「……もつと言うと？」

「一回こんな贅沢をしてみたかった」

「お前なあ……」

いくら共有して使うって言っても、

「人の金をそんなことの為に使うな!!」

霊夢の頭に「拳骨」を使って骨を落とす。

「いった！あんた、いきなりなにすんのよ！」

「無駄遣いをするな」

「干したりして保存できるから良いじゃないの」

「じゃあ、お前がやるんだな？」

「はあ？あんたがやりなさいよ。」

「なんで俺なんだよ」

「あんたはご飯担当でしょ？」

「はじめて聞いたんだが・・・」

「今決めた」

こいつ、曲がりなりにも巫女だよな？神に仕えてるんだよな？

「（―。―）・・・」

「な、なによ、その目は」

「軽蔑の目」

「なんであんたに軽蔑されなきゃいけないのよ」

「自分の胸にてを当てて思い出してみろ」

「思い当たらない」

「即答かよ」

なんか、ある意味尊敬するよ。

「因みに洗濯物はお前か？」

「あんたよ」

「掃除は？」

「私」

「買い出しは？」

「あんた」

「お風呂は？」

「それもあんたよ」

・・・こいつ、

「なにか問題でも？」

「問題しかないが？」

「掃除はしてるからいいじゃない」

「良くない」

逆に掃除はする理由を教えてください。

「いつもやってるから」

「成る程、やり慣れてるし直ぐに終わるからか」

「心読まないでくれる？」

「その言葉、そっくりそのままお返しします」

顔が全てを物語ってるんだよ。

「……とりあえず、お肉屋さんに行くわよ」

「おいこら逃げるなって速!!」

あいつ、この数秒で滅茶苦茶遠くに行きやがった。にしても、なん  
で走るだけで回りに風がおきるんだ？

「まあ、とりあえず「近道」」

霊夢が走ってる先に移動し拘束用意をする。ふふ、あれだけのス  
ピードだ、急には止まれまい。

「ニイイ（△△）」

ん？なんか嫌な予感が……

「甘い!!」

霊夢はそう言うとそのまま空に飛びあがった。

「あやのやろ……」

そつちがその気なら、

「開眼」！「重符」！

流石にこれでつてえ!?

「なんで落ちないんだ!？」

ちやんと発動してるのに……

「じゃあね〜」

「つて、逃がすか!!」

あんまり使いたくなかったけど、

「ナイトメア」

触手を伸ばして足首をつかむ。

「な、離しなさい!」

そしてこつちに引っ張る。が、暴れられて鬱陶しいので

「むぐ!?んー!んー!……ガクツ」

何をしたかは……察せ。

「やっと帰ってきた……」

背中 of 霊夢を放り投げる。(布団の上。片付けてなかった。)

「もう動きたくねえ……」



あの後、霊夢を捕まえたものの、回りに妖怪だと勘違い・・・いや、人間では無いからあつてるか。まあ、とりあえず騒がれて逃げられて、白髪もんぺと水色教師（先生って呼ばれてたし、生徒がどうたらこうたら言ってた。）に追いかけて回されて火を当てられたり弾幕張られたり、とにかく散々だった。

「寝るか・・・」

移動するのもめんどくさいから縁側でいいか。

「おやすみ・・・」

わたし——なま——は——あな——は？

お——は——で、よ——い——なんの——う——？

わ——し——さい——じ——こあな——は？

ゆか——ごは——きた——

あなた——つも——あ——が——う

どう——て——でこ——こ——

あ——がとうご——した、さよ——な——

紫さん

「ん？ん〜」

なんか変な夢を見てたような・・・

「気にするほどでもないか」

どうせ思い出せないし。今はそれよりも、

「霊夢は起きて・・・ないな」

余程あれが効いたのだろう。今朝のようなひどい寝相じゃなく、ちゃんと掛け布団を着ている。

「にしても腹へったなく〜」

昼食も食わずに寝たし。

「ご飯作ろ」

台所は確かこつちのはず・・・ん？

「なんで音がするんだ？」

ここには俺と霊夢以外ないはずだが。

「【武器】本物のナイフ【防具】ハートのロケット」

ばれないように気配を消して音のなる方へ向かう。

「・・・何故に台所？」

この匂いは・・・味噌汁に焼き魚、それと炊きたてのご飯、今日の

ご飯は和食かってそうじゃない。

「なんで料理作ってんだ？」

他人の家で料理を作る。うん、意味わからん。

「とりあえず・・・」

気づかれないように少しずつふすまを開けて除いてみると、

「！」

尻尾があった。しかもモフモフふかふかしてるのが九本も、

「!?!?!」

なんで？どゆこと？まで、落ち着こう、この状況を整理しよう、今

のこの状況は・・・九本のふかふかした狐の尻尾が自分の居候先の台所で料理を作っているってことに・・・うん、情報が多くて頭が追い

つかない。

「と、とりあえず話しかけて「何してるの?」うおわあ!!」

目の前に、逆さの、紫さんの、頭が、ががががが

「大丈夫?」

「ががが、が・・・チーン」

「え?ちよ、本当に大丈夫?!ら、藍!助けてー!!」

この後、尻尾で包んだら一瞬で起きた。

## 第十七話 黒歴史は誰にでもある・・・はず

く前回のあらすじく

モフモフふかふかは最高だく? (o、v、o) / ♪

「ん、んー・・・ん?」

「なんか、真つ暗なんですけど・・・」

「何だこれ?」

「なんか柔らかいものが俺の視界を塞いでいる。」

「少し暖かくて人肌みた・・・いい・・・」

俺って確か気絶したよね? その時に居たのって紫さんだよな? 紫さんって、何とは言わないけど発育が良かったよね? で、今頭の上にあるのは誰かの膝だよな? つまりは・・・

「あわわわわ?!? ち、「近道」!!!」

慌てて「近道」で抜け出す。死ぬかと思った・・・(精神的に)

「あら? 起きたの?」

「起きたの? じゃないですよ! 何してるんですか!」

「嫌だった?」

「嫌・・・ではないですけど・・・」

「ならいいじゃない。」

「よくないです!」

「あらあら、そんなに怒らないで。」

「ぐぬぬぬぬ・・・」

完全にバカにされてる・・・なんか悔しい。

「・・・こういうの、懐かしいわね」ボソツ

「? 紫さん、なんか言いましたか?」

「い、いえ、なんでもないわ。」

「そうですか。」

「なんか聞こえたような気が・・・」

「そんなことより、そろそろ藍がご飯を作り終えてる頃だから行きましょう。」

「藍さんって誰ですか？」

「あら、貴方も一度見たはずよ？」

もしかしてご飯を作ってた人？……あ、

「あのモフモフな尻尾の人ですか。」

あれはモフモフかふか好きとしてはたまらないですよ。

「そう、八雲 藍。九尾で、私の式神よ。」

……はい？

「えっと……もう一度言ってください。」

「八雲 藍。九尾で式神。」

「聞き間違えじゃなかった……」

九尾ってあれだよ、昔の中国の国を傾けたっていうヤバい妖怪ですよ？ しかもその九尾にご飯を作らしてる紫さんはもつとヤバいですよね？……よし、紫さんを起こらしては駄目だ。肝に命じよう。「ま、そんなことはどうでもいいわ。」

いや、俺にとつたら大問題なんですけど……

「早く行きましょう、ご飯が冷めちゃうわ。」

「分かりました……ん？」

えっと、その差し出された手は何ですか？

「手を繋がない？」

「……へ？」

ちよっと何言ってるか分からない。

「だから、手を繋がない？」

「さつきからどうしたんですか？ 変な物でも食べたんですか？」

よく見たら顔が赤いし、熱でもあるんじゃない……

「何となくよ、何となく。だからそんなに心配しなくても大丈夫だから。」

「なら良いですけど。」

何となくで手を繋ぐのか……うん、妖怪ってよく分からん。

「話が逸れたわね。それじゃあ、気を取り直して行きましょうか。」

「そうですね、行きましょう。」

お昼食べてないし、早く行きましょ。

少年と妖怪移動中

「美味しそう・・・」

襖を開けての一言めがこれだ。いや、だって本当に美味しそうなんだもん、献立は白米に鮎の塩焼き、豆腐と油揚げの味噌汁に肉じゃがと普通と言ったら普通なんだけど、一つ一つがもう光ってる、それぐらい美味しそう。

「あれ？お肉って買ったけ？」

確か、買う前に鬼ごっこが始まったから買えてない筈なんだけど・・・

「ああ、その肉は私が買ってきた。」

「？」

後ろから知らない声が聞こえたので振り返ると、

「・・・」

うん・・・予想と違う。いや、九尾って聞いてたから、もつと怖そうな見た目してると思ってたんだけど、真逆だ。目の前にいる人(妖怪)からはそんなのは一切感じない。それどころかふわふわした空気までまとっている。にしてもあの尻尾は本当にモフモフしてるなく触りたいなく

「どうした？おーい、聞こえてるかー」

「ん？あつすいません。」

危ない危ない、自分の世界に入り込んだ。

「えっと・・・藍さんですか？九尾の？」

「そうだが？」

「本当に？」

「どうしてそこまで疑うんだ？」

「いや、九尾って国を傾け」その話はしないでくれ。」あつはい。」

「ふふ、藍は昔はやんちゃだったわよね〜特に私と最初に会ったときなんて「あー！紫様！その話は止めてください!!」」

なるほど、どうも藍さんにとっての昔の事は黒歴史なのね。

「と、とにかく。ご飯が冷めてしまいますから、早く食べちゃいませう。」

「そうですね。」

顔を見るに紫さんも満足したらしいし、何より昼ご飯を食べてないからお腹空いた。

〜少年と妖怪と式神食事中〜

「(ごちそうさま(でした))」

「お粗末様でした」

美味しかった。本当に美味しかった。俺が食べてきた中で二番目に美味しかった・・・ん？だったら一番は何かって？それは・・・まあ、話せば長くなるから言わないよ。

「食器は私が片付けておこう。」

「ありがとうございます。」

「良いんだよ。いつもやってるからな。それに懐かしいものも見れたし」

「そうですか。」

懐かしいもの、ねえ〜・・・

「どうしたんだ？急に思い詰めた顔して。」

「いや、なんでもないですよ。」

懐かしい、つまり昔・・・もしかして関係が・・・んー分からん。でもまあ、一応頭のすみっこにおいておくか。

「ん？なんか、急に眠気が・・・」

おかしいな、さっきあんだだけ寝たのに。ご飯食べたからか？

「ふとんは・・・あった。」

あれ？なんでここにふとんを置いてたんだっけ？・・・まあいいや、

おやすみ・・・

この後、審が頭をお払い棒でへこまされるのは別のお話。



## 第十八話 家が壊れるのはよくあること

く前回のあらすじく  
頭が痛い・・・

「あ〜〜寒い。」

俺は今、霊夢に言われて雪かきをしている。くっそ、何が「じゃんけんで負けた方が雪かき当番ね。」だ。よくよく考えたらあいつ、じやんけん絶対に負けること無いじゃないか。しかも渋々やり始めたら想像以上に辛いし、なにより・・・

「今五月だよな？何で真冬並みの雪が降るわけ？」

おかげでこっちは六ヶ月間、毎日雪かきしてるんだが。

「てか、これ異変だよな。間違いなく。」

何で霊夢のやつはなにもしないんだ？

「まあ、めんどくさいからだろうけど。」

まったく、あいつには博麗の巫女としての自覚は・・・無いな。うん、絶対無い。

「ん？なんだあれ？」

何か猛スピードでこっちに向かってくるのが・・・

「止めてくれだぜ〜〜〜」

「つて魔理沙!？」

あいつ、このままじゃ神社にぶつかると!?

「と、取り敢えずなんとかしない」「ぶーっーかーる——!!」とつてうわああああ!!」

ドーン!ガラガラ・・・

魔理沙は俺を巻き込んで神社の玄関辺りに突撃。神社が・・・

「・・・なにこれ。」

凄いスピードで魔理沙が突っ込んできた。で、巻き込まれた。

「そう・・・」

ほんと、迷惑極まりないよ。

「あんた、喋ったら？」

「この瓦礫の下敷きになってるこの状況で喋れると思う？  
「出来ないの？」」

「にやけながら言うな、この鬼巫女が。」

「……」スツ（お払い棒用意）

「誠に申し訳ございませんでした。m（ ）m

「宜しい。」

「で？そいつどうする？」

「私、めんどくさいからあんたやって。」

「え〜〜〜お前が殺れよ、家主なんだし。」

「喋らないと、伝わらないわよ？」

「それを今さら言うか。」

「ハアア、しょうがない。だだ、やるからには殺ってやる。〔近道〕」

「覚悟しろよ、このオセロ魔女。」

「おい魔理沙、起きろ。」

「ん、ん〜？……」

「さて、覚悟はいいな？神社半壊させた魔・理・沙よお？」

「し、審。あれはわざとじゃないんだぜ。」

「うん。知ってる。〔開眼〕」

「だから、その、見逃してくれたら嬉しいかなって……」

「何言ってるんだ魔理沙。」

「仮にも家を壊されたんだぞ？なのに許すわけ……」

「ないだろうが!!」〔重符〕!!」

「うわああああああああ!!……」キラーン

「腹がたつたので、魔理沙を〔重符〕で思いっきり上空に飛ばした。いやーすつきり。暇なときに〔重符〕で重力の方向を自由に動かせるように練習しておいて良かった。」

「にしても……」

「後ろを振り返って……うん。見事なまでに破壊されてる。」

「これは直るのか？」

「ほとんど全壊してるけど。」

「大体一週間あたりで。」

「速くない?」

外でもそんなに速くないぞ?

「紫。」

「成る程。」

そりゃ速いわ。

「問題はその一週間、どこで過ごすかだけど・・・」

「紅魔館か?」

「そうなるわね。」

「じゃあ行くか。」

少年少女移動中

「と、いうわけで、暫くお世話に「帰れ」何でだよ。」

「あのね、いきなり現れて「暫くお世話になる」って言われて許可する方がおかしいと思うけど?」

「部屋も余ってんでしょ?なら別に良いじゃない。」

「それはそうだけど・・・」

「何で駄目なんだ?」

「なにかと疲れるのよ。」

だとよ、霊夢。

「何言ってるの?あんたのことでしょ?」

「・・・言っておくけど、あんたら両方ともだからね。」

「嘘だ!!」

「本当よ。後、勘を使って会話をするのは止めなさい。はたから見たら霊夢が一人で話してる様にしか見えないわよ。」

「分かった、分かった。で?結局泊めてくれるのか?」

「はいかイエスで答えなさい。」

「それは選択肢になってないわよ。」

「・・・」

「……………」

「……………」

何か嫌な予感が……

「弾幕ごっこならやらないぞ。」

「何だよ。」

やっぱりやるつもりだったのか。

「当たり前じゃない。」

「とにかく、俺はやらないぞ。」

「やらないならあんたは泊めな i 「ナイトメア」なツ……今回だけよ。」

「ちよつと!?!」

「ありがとよレミリア。じゃ、俺はフランのところに行くから。」

頑張れよ……

「近道」

と、いうわけで、

「よう、フラン。三日ぶりだ n 「え!?! シン兄様避けて!!」危険を察知い  
!!」

いきなり目の前に弾幕が……あと少しでも横に避けるのが遅かつたら当たってたな。

「シン兄様!!大丈夫?」

「ん?ああ、何とか大丈夫。」

「良かった……」

まったく、こうやって心配してくれるとこ、どこぞの腋巫女にも見習ってほしいよ。

「そういえば、シン兄様。」

「なんだ?」

「上から殺気が漏れてるんだけど……」

間違いなくあいつらだな。というかかなりの圧だな。紫もやし辺りは気絶してるんじゃないか?

「あく実は——」

少年説明中

「じゃあ、霊夢が勝てば・・・」

「俺は暫くお世話になる。」

「お姉様が勝てば・・・」

「最悪、野宿だな。」

野宿となると虫が気になるな。虫除けスプレーを持っていこう。

「シン兄様。」

「なんだ？フラン。」

「私、少し用事ができたからここでまっつて。スグニオワラセルカラ。」

まずい、フランの殺気が凄く出てる。

「フラン、一回落ち着いれ」「シン兄様？」・・・」

何か、既視感があるような・・・？

「まあ、とりあえず。」

「待っててね、オネイサマ？」

「せめて、楽に死ねる事を願ってるぞ。レミリア。」

一方その頃

(何かしら？急に寒気が・・・)

(  
・  
・  
・  
終わったわね  
)

## 第十九話 誰にも怖いものはある

く前回のあらすじく

レミリア終了のお知らせ

「速骨弾」 ジェットボーンガトリング」

「魔符」 スターダストレヴアリエ」

「禁弾」 スターボウブレイク」

「霊符」 夢想封印・散」

「幻幽」 ジャック・ザ・ルドビレ」

「え!?うそ、そんなの避けな——」

ピチューン

白い妖精が全員による集中攻撃を受け、そのまま下に落ちていく。確か名前は・・・レリーフライトロツク?とかそんなだったはず。

まあ、そんなことはさておき。今、俺は霊夢と魔理沙とフランと咲夜さんの五人で上空にきている。理由は昨日、紅魔館でレミリアがロボロになったところまで遡る・・・

~~~~~

「泊まれることになって良かったね!シン兄様!」

「あ、ああ、そうだな・・・」

そつと壁やらなんならがロボロボロになったほうを見る。大丈夫だよね?レミリア、死んでないよね?

「私、一応この家の主なのに何で・・・カリスマ、私のカリスマは・・・どこ?」ボソツ

あつ、肉体的には生きてた。あくまで肉体的にはだけど。精神的には死んじゃってるけど。まあ、妹にロボロボロにされるし、自分の従者

に説教されるし、実質ニートだしでカリスマなんて何処にもないと思うから探しても無駄だと思うぞ（ゝoゝ）

「にしても、なんかいやーな予感がするな・・・」

なんと言うか、一度起きたことがまた起きそうな感じがするけど・・・

「まあ、そんなわけね」「だぜー！！」「ドガーンバキツバキバキツ・・・あった。」

うん・・・もう驚かない。魔理沙が壁を貫通して、当の本人は「イタタタ」ぐらいで済んでることにも俺は驚かないぞ。

「ん？おお、審。丁度いいところに。」

「・・・はあ、なんだ。」

「お前に空に飛ばされた時に、空にでつかい穴が空いてるのを見たんだ。これは絶対に異変だ、早く行くんだぜ。」

うん。

「なあ、魔理沙。」

「な、なんだぜ？」

俺はできるだけ魔理沙の後ろを見ないように魔理沙の肩を掴み、話しかける。

「俺がここに来てからの短い付き合いだったが、楽しかったぞ。」

「え？それってどういうk」「ザ・ワールド」・・・」

わあ、咲夜さんがすっごい笑ってる（意味深）

「この大惨事を起こしたのは？」

「壁がボロボロなのは霊夢とレミリア。その大穴を開けたのは魔理沙です。俺はずっとフランと話してたりしたので関わってません。」

本当は壁の件にはフランも関わってるけど黙っておこう。めんどくさいし。

「本当？」

「神に誓って。」

~~~~~



と、いうことがあってこの事をフランに話したら「面白そう!!」って言つて、俺は何か嫌な予感がしたから反対だったんだけど、最後に泣きつかれて許可。結果、咲夜さんはフランの保護者として、霊夢は明らかな異変ということで嫌々、魔理沙は案内役として俺は同居人<sup>霊夢</sup>に無理やり付き合わされるといふ形でこの異変の調査をすることになった。

「ねえ、シン兄様。」

「ん?なんだフラン。」

「これなに?」

そう言つてフランが取り出したのは

「桜の花びらだな。」

「さくら?」

「ああ、春に咲く花で、これが咲く時期になると花見つて言うお祭り? 行事? まあ、宴会みたいなのをやったりもする。」

「そうなんだ。」

何でこんな季節につて、今の天候がおかしいだけで別に季節は合つてるのか。まあ、桜が咲いてないからおかしいのは変わり無いが。

「見えてきたぜ。あれが例の穴だ。」

「おお、こいつはでかいな。」

ずっと雲がかかってわからなかったが、そこには直径20m程の穴が開いていた。にしても、何も無い空間に穴が開いてるのつてなんか私のスキマみたい?」

「・・・お久しぶりです紫さん。」

「やっぱり前みたいに驚いてくれないのね。」

「流石にあれだけやられれば慣れますよ・・・」

いきなり目の前に現れては消え、現れては消えるを一日五回、酷いときには八回も毎日やられたらそりや慣れますよ。

「随分と久しぶりね、紫。で? 一体なにしに来たの?」

「ええ、実は——」



一方その頃

「ふふ、いいネタが入ったわ♪これなら文に勝てること間違いなしね」

また新たに一羽の犠牲者が確定したとかしてないとか。

## 第二十話 ゲームで笑ってるボスは大体強いよね

「前回のあらすじ」

ゆ、幽霊なんて怖くないし？

「南無阿彌陀仏、南無阿彌陀仏、南無阿彌陀仏……」

「ねえ、審？私の後でお経を唱えないでくれる？私は幽霊より貴方が怖いのだけれど。」

「それに、この竜の頭蓋骨みたいなやつをしまつてくれない？さつきから周りをうろちよろされて目障りなのよ。」

「南無阿彌陀仏、南無阿彌陀仏、南無阿彌陀仏、南無阿彌陀仏、南無阿彌陀仏……」

「そうだよ。早く元のシン兄様に戻つてよ。」

幽霊怖い、幽霊怖い、幽霊怖い、幽霊怖い……

「駄目だ、完全にパニックになつて私たちの声が届いてないぜ。」

お化けなんて嘘さ、寝ぼけた人が見間違えたんだ。そうだそうに決まつてる。

「大丈夫。私に任せて。」

元来幽霊とは魂だけの存在なだけで元は生きていた者の中にあつたもので別にそんな怖がる必要はないことは無くて足がないし金縛りしてくるし、怖いし、怖いし、怖いし、怖——

「これが終わつたら一日だけ、藍の尻尾をいくらでもモフモフさしてあげるけど？」

なん、だと……

「了解しました。この青木 審、不肖ながら全力でやらさせていただきます。」

「切り替え早!!」

モフモフは何者にも勝る。常識だ。

「そのわりには足が震えてるけど？」

「うるさい。」

怖いものは怖いのだよ。

「良かった〜シン兄様が元に戻った♪」

「完璧にいつもどおりでは無いですが、妹様がうれしいのなら構いません。」

な、なにいつてるの咲夜さん。俺はいつもどおりですよ？

「さてと、モ・・・じゃない、人里の為に早くこの異変を解決するぞ。」

「貴方、本音が出ちやつてるわよ。」

モフモフ、それこそが至高。はつきりわかんだね。

こんな茶番をすること約二分。少し先に人影が見えてきた。しかもどつかで見たことあるような感じがする。

「誰だったけ・・・よし、思い出せないし、無視しよう。」

とりあえず思い出せないので無視することにする。断じて、出来る幽霊の単産限り冥界から早く立ち去りたいからとか、今すぐにも戦利品モフモフにありつきたいからとかではない。

「皆が騒がしいから来て見れば生きた人間かって、そこのお前！無視するな！」

「？」キヨロキヨロ

「いや、辺り見渡さなくても貴方しかいないでしょ。」

「だとよ、魔理沙。」

「いや、あなたのことなんですが・・・」

「俺は無視してないぞ。見て見ぬ振りはしたけど。」

「・・・切る！」

「え？」

なんかいきなり切りかかってきたから「近道」で避ける。全く、こいつといい、わんころ榎といい、かりちゆミリアまアといい、どうしてこうも血気盛んなんだろう。

「どれもあんたが九割悪いけどね。」

そんなことは分かってるよ。

「とりあえず、面倒だから「開眼」で「重符」重力操作。そして、飛んでけー！！」

「え!?ちよ、うわあああああ~~~~!!・・・」キラン?

なんか腹が立ったので、魔理沙にしたように「重符」で上空に飛ば

した。

「ええ・・・(ドン引き)」

「やることがえげつないわね・・・」

「あれは辛いのだぜ・・・」(実体験)

「お星さまになつた♪」

「妹様・・・」

とりあえず、邪魔者は撃退?したので先に進む。五分程でようやく階段が終わり、巨大な門があったので、

「骨砲」ガスターブラスター」

「え?」

壊して進む。理由はない。なんとなく壊したかっただけだ。断じて、断じて怖さを紛らわすためにやった訳じゃない。

「さてと・・・紫さん?」

「な、なに?」

「もしかして・・・あれが幽々子とかいうやつですか?」

巨大な桜の木の周りを花びらが舞っている。そんな幻想的な風景の中に佇む、水色と白の着物を身につけ、紫さんやレミアアの帽子に似たドアノブ帽子を着けた、回りに人魂が浮かんでる桃色の髪の女性を指差しながら俺は言った。

「そうよ。」

「ちなみに種族は・・・」

「亡霊。」

「ですよ・・・よし。」

「やっぱり諦めませう」二日にしてあげる「よし、やっぱり一瞬で終わらしてやらア。」

「・・・このやり取り、さつきも見たわよね?」

「うん。」

モフモフが二日も・・・よし、本当に一瞬で、徹底的に、確実に殺つてやる。

「というわけで、先手必勝、「骨砲」ガスターブラスター×20&「速骨弾」ジェットボーンガトリング×20&「骨雨」ボーンレイン×2

0。」

卑怯だけど、不意討ちで殺らしてもらおう。さて、流石に避けられはまじか、全部避けきってる。というか、弾幕で相殺してる・・・凄いな、軽く千を越えてる骨を全部さばいてる・・・あっ、こっち向いて「華霊」スワローテイルバタフライ。「ツ!!」「近道」ショートカット!!」

反撃されたので直ぐに「近道」で避ける。俺がもといた場所を見てみると、小規模なクレーターができていた。

「危ないな・・・」

あれがあと少しで直撃してたとは・・・冗談にならないな。

「あらあら、避けられちゃったわ。」

おお、笑顔なのに見事なまでに目が笑ってない。

「なあ、これはお前らに任せ・・・なんだ、これ?」

やっぱり怖いので後ろの奴等々に丸投げしようとして後ろを向いたら俺以外の全員の周りに紫色の蝶が飛んでいた。なんか・・・とてつもなく嫌な予感がする。

「・・・本気なのね、幽々子。」

「当たり前よ、じゃないとここまでした意味がないでしょ?」

辺りに殺気が漂い出す。これは、フランと比べ物にならない・・・紫、どういうことなんだぜ。」

「・・・この蝶は、幽々子の「死を操る程度の能力」で作られているの。つまり、」

「少しでも触れたらその時点で死ぬってことね。」

「そのとうりよ霊夢。」

「そして、そんな即死の蝶が大量に周りを飛んでいる私たちは、」

「動いたら死ぬってことなのかぜ!」

「嘘でしょ・・・」

マジかよ・・・

「なあ、さっきの不意討ちが気に障ったなら謝る。だから、この蝶を消してくれないか?流石に、死ぬってのはやりすぎだ。」

「あら?そうかしら?」

そう言いながら顔を扇子で隠す。が、その顔が笑っているのは容易に想像できる。

「……何が目的だ。」

「貴方が勝ったら教えてあげるわよ」

「そうかよ。」

「骨砲」を幾つか出現させ、臨戦体勢をとる。正直、相手は冥界の管理人。フランのときのようにうまく行けるとは思っていない。だけど、俺はこの五ヶ月間、修行（霊夢に無理やりやらされた）を毎日している。そのお陰で、能力をうまく使えたりと確実に強くなっている。それに、

「後悔するなよ？」

友人を人質に取ったお前を、許すつもりは無いからな。

「Do you wanna have a bad time？」

？



## 二十一話 絶望って、いつも突然やってくるよね

く前回のあらすじく

カツコつけた審君（尚、足は震えている模様）

幽々子 said

「骨砲」ガスターブラスター!!」

竜の頭蓋骨の様なものから放たれた薄く青白い光線が私の頬を掠めてゆく。

「華霊」スワロウテイルバタフライ。」

私もそれに対抗して、自分の中でも比較的簡単な弾幕を放つ。

「これぐらいだったら!!」

その弾幕をそれは必死な様子で避けている。

「紫……」

ふと、古い友人を見てみれば、その顔は心配や歓喜、そして恐怖といった感情が入り交じっていた。

……正直、あの忠告が意味のないものだったことは既に分かっていたことだったけど……

「そこまでなの？ 貴女の想いは。」

彼女——紫とは、それなりに付き合いが長いと自負している。それこそ、彼女の式である藍を除けば一番である程には。しかし、私が覚えていた限り、彼女が何かにあそこまで何かの感情を向けたことはなかった。無論、それは私に対しても。

「……………」

改めて、目の前のそ<sup>得体のしれない何か</sup>れについて考える。

青木 審。6ヶ月前に幻想入りした、記憶にある人物や空想上の存在の能力を自らが得ることができる自称人間。今も私を睨み付けている紅魔の主の妹に兄と呼ばれ慕われていて、博麗神社の居候。そして、紫が手当り次第に人間を幻想入りさせてようやく見つけ出した存在。

この際、能力のことは一旦置いておこう。それよりも問題なのは、紫が手当り次第に人間を幻想入りさせて”の部分。

本来、偶然入ってきたのではなく、誰かの意思で外の世界から何かを持ち込むことは、幻想郷の要である博麗大結界を歪ませる可能性があるある危険な行為なのだ。そんなことを誰かが、ましてや幻想郷を誰よりも愛していると言っても過言でない紫がする筈がないのに、だ。

「敵の前で考え事とは、随分と余裕だな!!」「速骨弾」ジェットボーンガ トリング!!」

少し速いだけの単調で直線的な弾幕。本来なら避けることができずそれを、私は全身に受けた。

「くッ・・・ッ!!」

直ぐに体制を立て直そうとするも、目の前には既にそれがいて、

「こいつで終わりだああ!!ゼロ距離!!」「骨砲」ガスターブラスター  
!!!!」

薄れ行く意識の中で最後に見えたのは、心底安堵した顔の親友だった・・・

審said

「ハア・・・ハア・・・勝った・・・のか・・・」

正直、今の渾身の一発を耐えられたっていうなら、最早笑うしかないが・・・

「流石にそんなこ」「シン兄様~~~~!!」とはってどうしたフラング  
ハッ!!」

・・・恐らく、よほど心配してくれたんだろう。フランが目には涙をうかべて後ろから俺の背中に、猛スピードで抱きついてきた。よっ

て・・・

「アッ・・・アッアッ・・・アッ・・・」カクツ

「あれ？シン兄様？シン兄様くおくい」

俺の背中がかつて無い方向に曲がり、その場に倒れ込んだ。そしてフラン、心配してくれるのはありがたいが、揺さぶるのは止めてくれ痛い。

「返事がない・・・こんなにボロボロになるまでやられたんだねシン兄様・・・あの女、ユルセナイ。コワシチャオ」

フランの目から光がなくなり、その顔からは表情が消え、辺りには殺気が満ちる。うん、いつもの発作だな。

「まあまあ、フラン。一回落ち着いてレーヴァテインを下ろそうな」

まだ少し痛む体を起こしてフランをなだめる。フランのこの変化、もとい発作は、大体が俺に関わることで起きている。そのため、対処法も分かっているし、ある程度のことにも対応できるようになった。(ちなみに以前一回だけ、レミリアとおやつを奪い合った時に発症したらしいが、そのときはレミリアが折れることでなんとかなったらしい。)

「シンニイサマ？ワタシハオチツイテルヨ？」

そして、このようにこちらの声に耳を貸さない場合は、心を鬼にして、

「止めないんだったら、もう二度とプリンは作くらないぞ。」

「え?!うそ、どうして?!ひどいよ・・・」

俺がそう言うのと、フランはさつきまでのが嘘のように表情が戻り、涙ぐんだ目で俺を見る。

だ、駄目だ。耐えるんだ俺の良心よ。これはフランの為を思っているんだ。だから、耐えろ、耐えるんだ。

「・・・後でクツキーでもなんでも作ってやるから」

「それ・・・本当？」

「ああ、もちろんだ」

俺はそう言って、フランの頭を撫でる。うん。いつなでもサラサラしてて気持ちいい。流石俺の妹分。

「あんだ、本当にフランには甘いわね」

「ほんと、私るときとは大違いだぜ。このロリコン野郎」

「あ？今なんつったこのモノクロ魔女」

「ん？いま、目の前のロリコンがなにか言っただけだ、うまく聞かえなかつたなあ？」

魔理沙がニヤニヤしながら煽るようにそう言ってくる。正直腹立つけど、まあ、これもなれた。だからな、俺は大丈夫だからなフラン。だからキュツとしようとするな、な？

「ほんと、仲いいわね貴方たち」

「この状況を見て本当にそう思ってるなら、貴方の目は節穴かなにかですよ、紫さん」

扇子で表情が見えなくても、今の貴女が笑ってることぐらいわかるんですよ。

「でも貴方の顔、楽しそうじゃないですか」

咲夜さん？貴女までどうしてそっちの味方を？そして、なんで暖かな目でこちらを見るんですか。

「でもまあ、たしかに幸せっていうのは、こういうことを言うのかもな・・・」ボソツ

「？何か言っただ？」

「へ？い、いや、何でもない。ただの独り言だ」

どうも、少しだけ声に出てたみたいだな。全く、こういう時に勘が発動しないのは助かるな。こんな柄でもないこと思ってるって知られたら、絶対恥ずかしい。

だがまあ、俺はこの暮らしに満足してるし、この暮らしが続けばいいと願ってる。

「さて、異変も終わったし、早くモフに飛び込みたいから、帰ろうぜ」

「最早隠さないのね」

「隠したところで、だろ？」

「たしかに」

しかし、その幸せが消え去るのは一瞬で、

「本当は、幽霊が怖いんじゃないか？ん？」

「そ、そんなわけ・・・アハハハ」

突然だ。そして、

「！シン兄様！危ない！！」

「へ？」

腹を木の根が貫通したフランの姿  
フランに突き飛ばされて見た光景は正しく

グサツ

その幸せが壊れる瞬間そのものだった。

## 二十二話 小説とかの他の文ってあれは誰目線なんだろうね

〳前回のあらすじ〵

一難去つてまた一難

突然だがお前にとって家族とはなんだ？いなくなつては困る、大事な存在か、それとも、そこらでくたばつてもらつて結構。むしろそちらのほうが嬉しい。その程度の存在だろうか。

この男：審にとつて家族はその両方で、具体的にいえば母が前者、父が後者だった。

それがどうした、そんな話は前もしてたじゃねえか。てかお前誰だよ。つて声が聞こえてきそうだが、まあ待て。ここでもう少し、このことについて知ってもらつたほうが良いと思つてな。

つてなわけでもまず出生からだ。え？そんな前から説明するのかだつて？大丈夫俺もそんなわかつてない、てか本人もよく知らないだろうし。そんな長くはならねえよ。

さて、そんなこんなで話すが、一言で言つちまえばこいつは孤児、捨て子だった。孤児院には、山の中で拾われたつていうよくあるパターンで拾われた。

それで孤児院についたが、運がいいことにその人はみんな優しくてな、子供同士で楽しく遊んで、よく世話をしてくれる職員をお母さんと慕つたりしてして、まるで家族のような感じで暮らしてたらしい。知らんけど。

そんなある日、その孤児院が火事になった。まあ色々あつてそんなきの詳しい説明はできんが、助かったのは数人で大勢いた他の家族は真つ黒になつた、とだけ言おうか。

で、今まで住んでた孤児院が燃えちまつて、さてどこに住もうかつて時に現れたのが2回目の家族、最初に言つた母と父のことだ。

どうもこの二人は孤児院が火事になつたというニュースを見て来

たらしい。そこでこいつを見つけて自分たちが育てます。つてな感じであれやこれやと言う間に三人は家族になった。

最初はよかった。母と父は共働きであったが、共に明るく、そして共に自分たちの子供に全力で愛を注いでいた。そんな二人だったからか、こいつもすぐに心を許し、二人を親と慕った。

そんな二度目の幸せの歯車が狂いだしたのは、父が会社をリストラされたときだ。理由は会社の業績悪化による人員削減。察しのいいやつなら気付いただろうが、これがきつかけで、なんやかんやあつてあの二トパチカス野郎が生まれたわけだ。

あ？もつと詳しく説明しろだ？断る。これ以上説明したくないんだよ。

まあ、そんなだからかいつの日からか、こいつは父を家族とは見なくなった。悲しいことにな。

そして、そうなつてくるとこいつにとつての家族は母の一人になるわけだ。

もちろん、いつも気にかけていた。体はどうか、変なところはないか？なんて調子でいた。

しかし、悲しいかな。母は優しすぎた。クズになった父を養い、そんな父を最早嫌っていた息子に気を使って寮がある中学に行かしたり、息子に心配をかけぬようにと息子の前では元気で見せたり。ただ、そんなことをしては体が持つわけもない。

こうしてこいつは2回目の家族も失った……

まあ、あとはお前さんが知つてのとおりさ。

これからどうしようかって思つてたら変なところ連れてこられて、貧乏巫女と一緒に暮らせだの、お金を大量にあげるだの、赤の他人（しかも年上）に兄と慕われたりと、なかなか波乱万丈な時間を過ごした。もちろん、こいつにとつてこの時間は幸せだった。当たり前さ。こいつは2度も家族を失い、そこらへんに関してかなり気を病んでたからな。兄と呼ばれたり、誰かと一緒に暮らしたりが嫌なはずがなかった。

ん？そんなに気を病んでるようには見えなかった？そらそうだろう、

心に空いた大きな穴ついて、こいつ自身も気づいてなかったからな。

さて、ここまで長つたらしく説明してきたわけだが、結局何が言いたいかというと、こいつは、身近な人間（特に家族）のことになると割とメンタルボロボロなんだってことだ。

じゃあ、ここぞそのことを踏まえて質問をしよう。

いま、こいつの目の前にあるのは何だった？

「あ…ああ……」



何が貫かれてるんだった？

「ああ……あゝあッ」

妹…家族はどうなってるんだった？

